

大分県
埋蔵文化財年報 1

1991年度



1993

大分県教育委員会

序 文

近年、埋蔵文化財をめぐる情勢は、開発行為の増加と開発規模の拡大に伴って、急激に変化しています。単及び、市町村教育委員会では文化保護法に基づき、埋蔵文化財の保護対策を進めていますが、発掘調査件数の増加に伴い、貴重な遺跡の発見も相次いでいます。

こうした埋蔵文化財の保護に当っては、行政の取組や施策の展開・調査成果を広く県民に紹介し、御理解と御協力を得て進める必要があります。

このため、このたび、平成3年度に大分県下で行われた埋蔵文化財の発掘調査を中心にその概要を集大成し、これに新たに国や県・市町村教育委員会指定となった埋蔵文化財や関係文献をも加えて本書を刊行いたしました。

本書が埋蔵文化財保護の資料として県民をはじめ、関係機関の皆様にも活用されることを希望いたします。

最後に、本書の刊行に際し、各市町村教育委員会をはじめ、関係各位の御協力に厚くお礼申し上げます。

平成5年3月31日

大分県教育委員会

教育長 宮本高志

目 次

序 文	1
I 埋蔵文化財保護行政	2
1. 現 状	2
2. 発掘調査体制の整備	3
3. 発掘件数の推移	3
II 1991年度埋蔵文化財発掘届出による動向	4
III 各遺跡の調査概要	8
中津・宇佐地域	9
東国東・別府地域	58
日田・玖珠地域	75
大分・北海部地域	102
竹田・大野地域	127
南海部・佐伯地域	145
IV 現地説明会・展示会・講演会・シンポジウム等一覧	148
V 1991年度の史跡指定埋蔵文化財一覧	151
VI 掲載遺跡一覧表	152
VII 1991年度の埋蔵文化財関係文献一覧	158

(本書の作成は、文化課(担当坂本・牧尾・高橋(信)・田中・友岡)で行った。IIIの各遺跡の調査概要は調査担当者が分担執筆した。表紙写真は府内城三の丸遺跡出土品。)

I 埋蔵文化財保護行政

1. 現状

文化財保護法によれば、土地に埋蔵されている遺跡や遺物は埋蔵文化財と呼ばれている。1974年度の資料(「全国遺跡地図・大分県」)によれば、大分県下には1548件の埋蔵文化財包蔵地がある。その内訳は表1のとおりである。その後、急増した発掘調査例やその後個別の市町村が行った分布調査の成果を加えれば、現状で把握できる実数はもっと多くなるが、県教育委員会では今年度新たな遺跡地図の刊行を予定しているので、詳細はそれに譲る。

私達が人間としての過去・現在・あるべき未来の姿を考える時、同じ土地に生きた人々の記録として埋蔵文化財は貴重な資料となる。破壊するに任せていたのでは、先人の知恵から何も学びとることができない。埋蔵文化財保護行政としては、埋蔵文化財を現状のまま保存すること、必要に応じて有効に活用することが基本的な使命である。しかしながら現実には、埋蔵文化財のある同じ大地の上で文化財の保護とは別の目的で様々な土地に対する改変が計画され、否応なしに対応に追われ続けている。出土した膨大な量の遺物や学術上価値の高い調査の成果も、調査報告書の刊行後は倉庫に眠ったままである。これからは、県民をはじめとした人々に学習の場を提供することも必要であろう。

表1. 周知の埋蔵文化財包蔵地

種類	数量
集落跡・遺物散布地	461
占墳	564
横穴墓	171
その他の墓跡	85
寺院跡	42
城跡	62
館跡	6
貝塚	30
生産遺跡	19
条里跡	22
経塚	8
洞穴	8
その他	70
計	1,548

(1975年3月20日現在)

表2. 埋蔵文化財担当職員数

機関名	県文化課	県風土記の丘市	中津市	三光村	宇佐市	安心院町	豊後高田市	国東町	安岐町	杵築市	日出町	別府市	日田市	玖珠町	大分市	臼杵市	津久見市	竹田市	計
人数	20	3	2	1	6	1	1	2	1	1	1	1	2	1	4	2	1	2	53

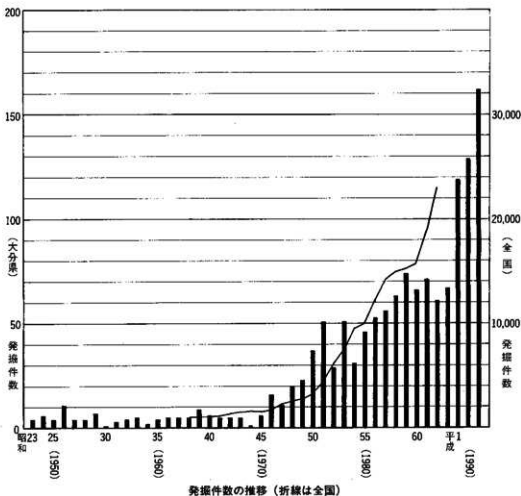
(平成4年3月現在)

2. 発掘調査体制の整備

諸々の開発の増加に伴う遺跡の確認調査、文化財保護のための協議・調整、発掘調査・遺跡整備事業等の保護体制の充実を図るため、県では文化課を設置し専門職員を置いている。市町村でも専門職員を採用する所も増えているが、県内58市町村のうち15カ所に留まり(表2)、専門職員を置いている所でも発掘調査に追われる状態であり、体制の充実が今後の課題である。

3. 発掘件数の推移

下図は、1948年以降の県内で行われた発掘調査の推移を棒グラフにしたものである。1970年までは1951年を除いて年間10件以下の発掘数であったが、1971年からは増加に転じている。この傾向は本県だけのものではなく、全国の統計資料(折線グラフ)も同様の結果を示している。



II 1991年度埋蔵文化財発掘届出による動向

先に触れたように、埋蔵文化財の発掘調査件数は1971年以降増加の一途を辿っている。県内では当初、大野川流域の圃場整備や土地改良事業に関する調査が主体であった。現在では調査の原因となる事業も分散し、現在では道路建設事業がもっとも多く、次いで農業関連、宅地造成が続いている。

地域別にみると、中津・宇佐地域では北大道路建設関係の調査が一段落し住宅建設・公共工事・民間事業が、国東半島部では農業関連事業が多い。一方、日田・玖珠地域では高速道路建設事業が主体を占め、試掘調査・発掘調査が増加している。大分地域では調査原因として住宅関連事業が目立つ。大分市の府内城三の丸の調査は府内城下町の調査の手始めであったが、ビルの下であったにもかかわらず予想外に良好な遺構・遺物が出土することを示した。大野・竹田地域では農業関連事業は峠を越し、各種の調査がある。現在、全国的な傾向としては、宅地の造成や立て替え等の住宅関連

・道路建設・農業関連の事業が主体を占めている。これに比べ、本県ではまだ住宅関連事業で十分に対応できなくて、加えて今後は観光開発・工場造成・県道等の公共事業が増加すると考えられる。

平成3年度 大分県発掘調査の動向

事業名	件数	%
道路建設	38	29.7
河川改修	4	3.0
学校関連	5	4.0
住宅宅地	13	10.0
土地区画	2	1.6
観光開発	5	4.0
電気工事	5	4.0
工場関連	8	6.2
農業関連	20	15.6
土砂採取	1	0.8
自然崩壊	2	1.6
遺跡整備	5	4.0
ゴルフ場	2	1.6
公園関連	4	3.0
学術研究	1	0.8
急傾斜	3	2.3
その他	10	7.8



平成3年度 大分県埋蔵文化財発掘届・発見届一覧

番号	遺跡名	所在地	届出者	事業内容	時代	根拠条
1	佐知久保知遺跡	三光村大字佐知	三光村長	店舗建設	縄・弥・古墳	98条の2
2	関遺跡	大分市大字羽屋	大分市長	道路	弥・古・奈	57条の3
3	下高尾遺跡	杵築市大字熊野	鶴ラービーム	ゴルフ場	縄	57条の2
4	賀米中学校遺跡	大分市大字中尾	大分市長	学校建設	弥生・中世	57条の3
5	川部遺跡	宇佐市大字川部	宇佐市教育長	公園	弥生・古墳	98条の2
6	東上田遺跡	宇佐市大字上田	宇佐市教育長	工場建設	弥生	98条の2
7	後追遺跡	日田市大字渡里	大分県教育長	道路	弥生	98条の2
8	羽野横穴群	日田市大字三和	大分県教育長	道路	古墳	98条の2
9	日田桑里群	日田市大字三和	大分県教育長	道路	奈良	98条の2
10	大迫遺跡	日田市大字有田	大分県教育長	道路	古墳	98条の2
11	尾漕遺跡	日田市大字有田	大分県教育長	道路	弥生・古墳	98条の2
12	参勤文管道路	日田市大字東有田	大分県教育長	道路	近世	98条の2
13	七ツ枝遺跡	日田市大字有田	大分県教育長	道路	弥生・古墳	98条の2
14	谷ノ瀬遺跡	玖珠町大字戸畑	大分県教育長	道路	弥生・古墳	98条の2
15	白峯遺跡	玖珠町大字四日市	大分県教育長	道路	古墳	98条の2
16	台峯垣遺跡	玖珠町大字綾垣	大分県教育長	道路	古墳	98条の2
17	池ノ原遺跡	玖珠町大字綾垣	大分県教育長	道路	弥生・古墳	98条の2
18	治別当遺跡	玖珠町大字四日市	大分県教育長	道路	縄～古墳・奈	98条の2
19	瀬戸遺跡	玖珠町大字四日市	大分県教育長	道路	弥生・古墳	98条の2
20	帆足遺跡	玖珠町大字四日市	大分県教育長	道路	中世	98条の2
21	虚空藏寺遺跡	宇佐市大字山本	宇佐市教育長	道路	奈良・平安	98条の2
22	中原遺跡	宇佐市大字中原	宇佐市教育長	道路	縄～奈良・平安	98条の2
23	下林遺跡	宇佐市大字山本	宇佐市教育長	道路	縄・近世	98条の2
24	下郡遺跡群	大分市大字下郡	大分市長	区画整理	縄～近世	57条の3
25	新原遺跡	安心院町大字新原	安心院町長	道路	弥生・古墳	57条の3
26	東中尾・有田遺跡	大分市大字横尾	大分市長	区画整理	弥生・古墳	57条の3
27	わらみの遺跡	国東町大字大恩寺	東国東振興局	果園	縄文	57条の3
28	東ノ浦遺跡	中津市大字永添	中津市教育長	学校建設	古墳・中世	57条の6
29	宮迫坊中跡	宇佐市大字南宇佐	真上敬一	住宅	中世・近世	57条の2
30	恵良城跡	九重町大字恵良	麻生直司	宅地	中世	57条の2
31	神手遺跡	宇佐市大字山本	宇佐市長	道路	弥生・古墳	57条の3
32	米竹遺跡	大分市大字小池原	住友化学工業	宅地	弥生	57条の2
33	岩屋遺跡	国東町大字岩屋	東国東振興局	果園	古墳	57条の3
34	大丸川流域遺跡群	中津市大字如来	中津土木事務所	河川	弥・古・奈・中	57条の3
35	玉沢遺跡	大分市大字上宗方	大分土木事務所	道路	奈良	57条の3
36	中川家墓所	竹田市大字会々	竹田市教育長	史跡整備	近世	98条の2
37	ムナソリ遺跡	安心院町大字妻垣	安心院町長	防火水槽	弥生・古墳	57条の3
38	三口田遺跡	安心院町大字下毛	安心院町長	文化会館	奈良	57条の3
39	塔ノ熊麿寺	三光村大字西まくさ	三光村教育長	学校建設	奈良	57条の3
40	智恩寺遺跡	豊後高田市大字智恩	大分県教育長	学術研究	中世・近世	98条の2
41	鷹巣横穴古墳群	玖珠町大字帆足	佐々木福美	道路	古墳	57条の5
42	岡城跡	竹田市大字岡	竹田市教育長	保存修理	近世	98条の2
43	滝藤太郎田宅	竹田市大字竹田	竹田市長	観光開発	近世～明治	57条の3

番号	遺跡名	所在地	届出者	事業内容	所代	根拠条
44	府内城跡	大分市大手町	大分県知事	庁舎建設	近世	57条の3
45	上小倉横穴古墳群	弥生町大字上小倉	大分県知事	急傾斜	古墳	57条の3
46	久末京徳遺跡	安岐町大字朝米	安岐町教育長	学校建設	奈良・平安	57条の3
47	上野切畑山遺跡	日田市大字上野	日田市長	遺跡	弥・奈・中世	57条の3
48	惣田遺跡	日田市琴平町	日田市長	道路	中世	57条の3
49	伐株山城跡	玖珠町大字山田	大分県知事	無線中継	中世	57条の3
50	延吉遺跡	安岐町大字下山口	安岐町長	福祉施設	平安	57条の6
51	天神面遺跡	竹田市大字倉木	大分県知事	果園	縄・弥・古墳	57条の3
52	伐株山城跡	玖珠町大字山田	柳大分テレ	無線中継	中世	57条の2
53	猪野遺跡	大分市大字猪野	大分県知事	住宅	弥生	57条の3
54	前畑遺跡	中津市大字犬丸	柳鬼怒川ゴム	駐車場等	古墳	57条の2
55	塩井遺跡	竹田市大字小塚	農業水利事業所	農業関連	弥生	57条の3
56	爰迫遺跡	三光村大字下深木	三光村教育長	農業関連	中世	57条の6
57	上下田遺跡	三重町大字川辺	柳九州電力	鉄塔	旧石器	57条の2
58	小田遺跡	玖珠町大字小田	玖珠町教育長	学校建設	弥・中世	57条の3
59	笹ヶ平遺跡	安心院町大字笹ヶ平	両院地方振興局	果園	弥・中世	57条の3
60	長木遺跡	大分市大字猪野	大分土木事務所	道路	弥生	57条の3
61	女鹿遺跡	宇佐市大字上田	柳九州電力	鉄塔	弥生	57条の2
62	原遺跡	安心院町大字原	両院地方振興局	果園	中・近世	57条の3
63	陣箱遺跡	三重町大字百枝	三重町教育長	道路	弥生	57条の3
64	宗禪寺遺跡	安心院町大字新原	安心院キノコ	工場建設	弥・古・奈良	57条の2
65	羅山遺跡	別府市大字内藤	別府市長	公園	縄文	57条の3
66	羽野横穴群	日田市大字三和	大分県知事	急傾斜	古墳	57条の3
67	武家屋敷跡	竹田市大字山手	大分県知事	道路	近世	57条の3
68	近世水路	竹田市大字山手	大分県知事	道路	近世	57条の3
69	諫山遺跡	三光村大字原口	三光農協	農業関連	弥生	57条の2
70	瀬戸古墳	玖珠町大字帆足	日本道路公団	道路	古墳	57条の6
71	岡城跡隣接地	竹田市大字竹田	竹田市教育長	遺跡整備	近世	98条の2
72	駒方代ノ原遺跡	大野町大字中原	大野町教育長	農業関連	旧石器	98条の2
73	鶴台の跡	竹田市大字竹田	竹田土木事務所	河川	近世	57条の3
74	長谷横穴古墳群	大分市大字羽田	柳華友	宅地造成	古墳	57条の2
75	井村遺跡	臼杵市大字井村	柳幸商事	宅地造成	縄・弥生	57条の2
76	井室遺跡	柳日相土地建物	柳日相土地建物	宅地造成	旧・縄文	57条の2
77	杵築城跡	杵築市大字杵築	杵築市長	公園整備	近世	57条の3
78	小園遺跡他	竹田市大字戸上	竹田市長	水道	弥生	57条の3
79	辻原遺跡・田井原	竹田市	大分県知事	道路	縄・弥生	57条の3
80	向子寺	安岐町大字向子	安岐町教育長	観光開発	中世・近世	98条の2
81	サヤ遺跡	宇佐市大字山本	大分県教育長	道路	縄・弥・奈・近	98条の2
82	中世墓	三光村大字臼木	亀頭たけし		中世	57条の5
83	桑里跡	安心院町大字荘	柳九州電力	鉄塔	奈良・平安	57条の2
84	宮ノ原遺跡	安心院町大字下毛	安心院町教育長	自然崩壊	弥・古墳	98条の2
85	臼杵石仏群	臼杵市大字深田	臼杵土木事務所	河川	中世	57条の3
86	雄城横穴	大分市大字玉沢	大分県知事	急傾斜	古墳	57条の6

番号	遺跡名	所在地	届出者	事業内容	時代	根拠条
87	小塚原山遺跡	竹田市大字原山	竹田市教育長	農業関連	縄・弥生	98条の2
88	百枝牟礼越遺跡	三重町大字百枝	三重町教育長	土砂採取	旧石器	57条の6
89	都原遺跡	九重町大字引治	九重町教育長	用地造成	縄文	57条の6
90	東田家遺跡	大分市南王子町	大分県知事	公共施設	縄・古墳	57条の3
91	上万田遺跡	中津市大字万田	建設省	河川	縄・古墳	57条の3
92	下屋形遺跡	本耶馬溪町大字下屋形	下毛地方振興局	果園	縄・古墳・中世	57条の6
93	若宮遺跡	安心院町大字橋本	安心院町教育長	自然崩壊	古墳	57条の6
94	笹ヶ平火葬墓	安心院町大字笹ヶ平	安心院町教育長	果園	中世	57条の6
95	豊後園分寺跡	大分市大字園分	大分市長	史跡整備	57条の3	57条の3
96	牟礼越遺跡	三重町大字百枝	都良男	農業関連	旧石器	57条の2
97	御堂遺跡他4遺跡	香々地町大字香々地	西高地方振興局	果園	中世	57条の6
98	上野遺跡群	大分市大字三芳	大分市長	公園整備	弥生・古墳	57条の3
99	古城得ノ岡ノ前遺跡	大田村大字資掛	西高地方振興局	果園	縄・古墳・中世	57条の6
100	安心院盆地桑甲	安心院町大字久井田	安心院町長	倉庫建設	奈良・中世	57条の3
101	沖代糸渠遺構	中津市大字中央町	㈲カネカ開発	宅地造成	奈良	57条の2
102	野口遺跡	宇佐市大字川部	鶴九州電力	観光開発	弥生	57条の2
103	吉祥寺跡	別府市大字別府	㈲別府国際観光	観光開発	中世	57条の2
104	下野・上津尾遺跡	大町町大字久原	建設省	道路	縄・弥生・中世	57条の3
105	小園・大塚遺跡	竹田市大字戸上	建設省	道路	弥生	57条の3
106	白杵石仏群地域遺跡	白杵市大字深田	白杵市長	道路	中世	57条の3
107	萩鶴遺跡	日田市大字友田	㈲溝江建設	商業施設	中世	57条の2
108	千之尾遺跡	国東町大字北江	東国東振興局	果園	弥生・中世	57条の6
109	西大久保遺跡	安心院町大字久井田	安心院土地開発	工場建設	弥生・古墳	57条の3
110	岡藩銭座跡	竹田市大字竹田	加藤一郎	病院建設	近世	57条の2
111	割掛遺跡他	豊後高田市大字米縄	西高地方振興局	果園	弥生・近世	57条の6
112	葛木遺跡	大分市大字葛木	大分市教育長	宅地造成	弥生	57条の6
113	尾立・前田遺跡	安心院町大字尾立	西院地方振興局	道路	中世・近世	57条の3
114	京塚古墳群	宇佐市大字高森	大分県教育長	遺跡整備	奈良	98条の2
115	陣ヶ原遺跡	日田市上野町	大分県教育長	道路	弥生	98条の2
116	中原遺跡	中津市大字中原	中津市教育長	住宅建設	弥生・古墳	98条の2
117	ゆるぎ道遺跡	三光村大字下深水	三光村教育長	農業関連	中世	98条の2
118	恵良城跡	九重町大字恵良	九重町教育長	宅地造成	中世	98条の2
119	御塔山古墳	杵築市大字狩宿	杵築市長	観光開発	古墳	98条の2
120	美濃尾遺跡	三光村大字森山	三光村教育長	工場造成	弥生・古墳	98条の2
121	宗禪寺遺跡	安心院町大字新原	安心院町教育長	工場造成	弥生・古墳	98条の2
122	岩ノ上遺跡	大野町大字宮迫	大野町教育長	果園	古墳	98条の2
123	佐知久保畑遺跡	三光村大字佐知	三光村教育長	道路	縄・弥生・古墳	98条の2
124	藩校進修館	中津市片鐘町	中津市教育長	公共事業	中世・近世	98条の2
125	横田条里	大分市大字木ノ上	大分県教育長	道路	縄・近世	98条の2
126	天堀遺跡群	日出町大字藤原	日出町教育長	ゴルフ場	旧・縄文	98条の2
127	小照山古墳	杵築市大字狩宿	杵築市教育長	墓地造成	古墳	98条の2
128	小部遺跡	宇佐市大字荒木	宇佐市教育長	住宅建設	弥生・古墳	98条の2

III 各遺跡の調査概要

大分県を地域的に次の6地域に分け、記載してゆく。

各地域は、教育事務所管内に従って分けた。

中津・宇佐地域は旧豊前国を中心とした県北西部である。東国東・別府地域や、大分地域の大部分は海に面し、ともに中・四国の影響を受ける地域である。県西部の日田・玖珠地域は筑後川の上流域の内陸部である。大野・竹田地域は熊本・宮崎につながる地域である。佐伯・南海部地域は豊後水道に面した海岸部と宮崎に接した内陸部よりなる。



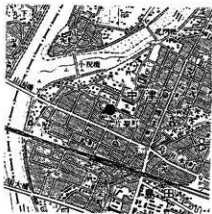
1. 藩校進脩館跡

所在地	中津市片端町	調査面積	350㎡
調査原因	市立図書館建設	担当者	栗焼 憲児
調査期間	911215～920220	処置	調査後破壊
調査主体	中津市教育委員会		

位置 中津の城下町は、山国川の河口付近に位置する中津城を中心として町割りが行われている。この、中津城下の上級士族の屋敷地の一角に藩校進脩館が開設された。現在の中津市片端町（旧中津市役所敷地内）にあたる。

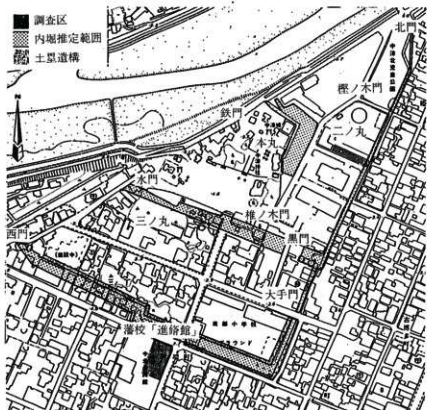
遺構 調査地は後世官公庁を中心に様々な建造物が建てられており、かなりの擾乱が認められた。そうした中で、藩校進脩館に関連する遺構としては土壇5基、溝状遺構1条が確認された。そのうち、興味ももたれたのは溝状遺構で、後に排水溝として再利用されているものの、藩校の周囲を巡る暗渠排水と考えられた。

遺物 出土した遺物のうち陶磁器類では日用雑器が多く、主に伊万里系の白磁が多い。その他、手あぶり火鉢や灯明皿なども見られる。また、石筵、石板、硯、さらには手あぶり火鉢の口縁に見られる「学」の刻線などは、藩校をイメージするには十分な資料と言える。瓦類も多く出土しており、軒丸は全て巴文であり、鬼瓦、鳥衾などもあることから、かなり大きな建物であったことがうかがわれる。

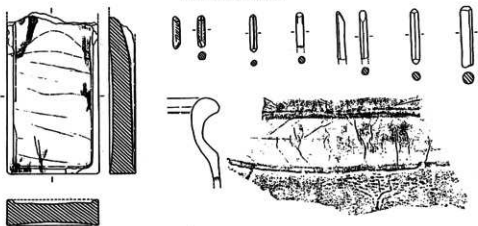


藩校進脩館跡位置図

文献：栗焼憲児・柳田昭仁「藩校進脩館跡」
『中津地区遺跡群発掘調査概報』Ⅳ
1992。



道徳館跡周辺地形図



藩校道徳館跡出土遺物

0 10cm

2. 相原^{あいほらはいし}廃寺

所在地 中津市大字相原3657番地ほか
調査原因 宅地開発
調査期間 920302～920331
調査主体 中津市教育委員会

調査面積 約100㎡
担当者 栗焼 憲児
処置 埋戻後保存

位置 沖積平野である沖代平野の南部、平野の最深部に所在する。周辺は島状の微高地が入り組んだ状況で所在し、この微高地に囲まれるようにして寺域が設定されたと考えられている。位置的には当時の主要な経済基盤であった沖代平野を一望出来る場所にあり、下毛一帯を統括した人物の氏寺と考えられている。

遺構 1988年度から確認調査を実施しており、今年度は建物基壇の規模の確定を目的として調査を実施した。その結果、建物基壇は南北13m（約43尺）の規模であることが判明したが、東西の規模については明確にし得なかった。

遺物 これまでの調査では、軒丸、軒平とも百済系の単弁八弁と重孤文が検出されており、今回の調査でもこれ以外のセットは確認できなかった。しかし、軒丸瓦は3タイプの文様が存在しており、そのうち最も古いと考えられているAタイプが建物基壇に集中することが今回確認された。このことは、上部構造が不明な建物基壇の性格と、伽藍配置を推定するうえで重要な意味をもつものと考えられる。



相原廃寺位置図

文献：栗焼憲児・棚田昭仁「相原廃寺跡」
『中津地区遺跡群発掘調査概報』Ⅳ
1992。

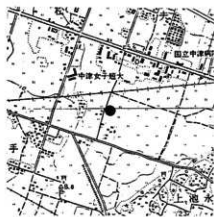
3. 沖代条里遺構

所在地	中津市中央町	調査面積	約300㎡
調査原因	宅地造成	担当者	栗焼 憲児
調査期間	920307～920314	処置	調査後造成
調査主体	中津市教育委員会		

中津市の中央部に位置する沖代平野は、山国川によって形成された沖積平野で、中津の穀倉地帯として古くからその経済基盤を支えて来た。奈良時代にはすでに条里制がしかれたと考えられており、現在でもその遺構を容易に識別することができる。

ところが、この沖代平野で近年盛んに宅地造成が行われるようになったため、その都度確認調査を実施している。しかし、実際には条里遺構に関する遺構を検出することは殆ど不可能に近く、今回の調査でも特に関連する遺構等は検出できなかった。

尚、今年度の沖代条里遺構の調査件数は2件である。



沖代条里遺構調査位置図

4. 原遺跡

所在地 中津市大字如水平原
調査原因 工場用地造成
調査期間 911115
調査主体 中津市教育委員会

調査面積 約200㎡
担当者 栗坡 憲児
処置 平成4年度本調査

中津市の中央部、下毛原台地上に所在する。標高約20mを測り、洪積台地上の火山活動により形成されたと考えられる微高地上に位置する。確認調査の結果、竪穴式住居跡、掘立柱建物等を確認したため、次年度本調査を実施することとした。



原遺跡位置図

5. 十前垣遺跡

所在地 中津市大字犬丸字十前垣
調査原因 駐車場建設
調査期間 910805
調査主体 中津市教育委員会

調査面積 約500㎡
担当者 栗坡 憲児
処置 調査後建設

1987年に園場整備事業実施に伴い調査を実施した。通称“下毛原台地”と呼ばれる洪積台地の先端部に位置し、標高約20m程、海岸までは直線で2km程に位置する。前回の調査では6世紀末の集落跡を確認しており、今回はその集落の展開を確認することを目的とした。しかし、調査の結果申請地の大部分が1970年代に実施された県営園場整備により削平されていることが判明し、何ら結果を得ることはできなかった。



十前垣遺跡位置図

6. 中原遺跡

所在地 中津市大字中原字榑原
調査原因 市営住宅建設
調査期間 920107～920228
調査主体 中津市教育委員会

調査面積 3,000㎡
担当者 棚田 昭仁
処置 調査後埋戻保存

位置 中津市の中央部、通称“下毛原台地”と呼ばれる洪積台地上に所在し、標高約22mを測る。周辺には中津の古代史上重要な役割を果たしたと考えられている薦神社が鎮座しており、重要な地域と言える。

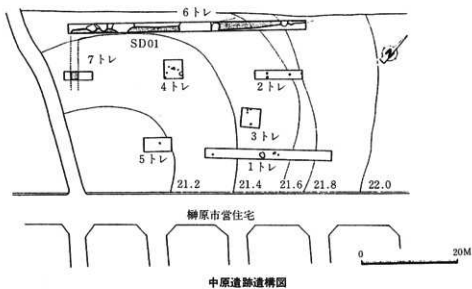
遺構 調査は1991年8月に確認調査を行い、本調査は1992年1月～2月にかけて実施した。調査の結果、一辺60mに及ぶと考えられる方形の溝状遺構の二辺と、その内側から竪穴式の建物遺構2棟を検出した。これらは出土した遺物より、いずれも18世紀後半代を中心としたものと考えられ、遺跡の性格を知るうえで興味深いものとなった。

遺物 出土した遺物の多くは18世紀後半代の染付である。ほかに、唐津系の鉢やホウロク焼きの鉢なども出土している。また、溝状遺構より「寛永通寶」が5枚、土師器の小皿に納められた形で出土しており、呪術的な意味合いをもつものとして注目された。



中原遺跡位置図

文献：栗焼憲児・棚田昭仁「中原遺跡」
『中津地区遺跡群発掘調査概報』Ⅳ
1992。



中原遺跡全景（南側より）

7. 東ノ浦遺跡

所在地 中津市大字永添字東ノ浦
調査原因 学校グラウンド拡張
調査期間 910420～910730
調査主体 中津市教育委員会

調査面積 約2,000㎡
担当者 栗焼 窓見
処置 調査後破壊

位置 中津市のほぼ中央部、通称“下毛原台地”と呼ばれる標高26m余りの洪積台地上に所在する。調査区のすぐ北側を別名「勅使道」と呼ばれる官道が通り、勅使の主要中継地である薦神社まで数百mの位置にある。

遺構 溝状遺構を中心に柱穴等が検出された。溝状遺構は方形を呈するものと考えられたが調査区の都合で一辺のみしか検出できなかった。また、後世の削平が著しく遺構の残存状況も良好ではなかったが、溝状遺構の中央部が明かに出入り口と考えられたことで、居館等が存在した可能性を指摘できた。

遺物 土師器を中心に出土したが、量的に少なく時期を特定するにはやや問題がある。しかし、その特徴から少なくとも中世の所産であろうと推定できた。



東ノ浦遺跡位置図



東ノ浦遺跡全景（南側より）



東ノ浦遺跡 溝状遺構

8. おいけみなふいせき 大池南遺跡

所在地 中津市大字賀来
調査原因 店舗建設
調査期間 910511
調査主体 中津市教育委員会

調査面積 約200㎡
担当者 栗焼 憲見
処置 調査後建設

1985年に中津バイパスの建設に伴い調査されている。洪積台地上にあり、標高36mを測る。調査の結果特に遺構、遺物などは検出できなかった。しかし、地形的には良好な場所があり、今後注意しなければならない。



大池南遺跡位置図

9. 犬丸川流域遺跡群 第5地点・第6地点

所在地 中津市大字福島字小平
調査原因 河川改修
調査期間 910410～911215
調査主体 中津市教育委員会

調査面積 約5,000㎡
担当者 柳田 昭仁
処置 調査後破壊

位置 中津市の南東部、標高20m余りの犬丸川の氾濫原に立地する。犬丸川は八面山の麓に端を発する2級河川で、小規模な沖積面を形成しながら周防灘に至っている。この犬丸川の流域で近年河川改修によって多くの遺跡が確認されており、今回の調査もその一環である。

遺構 第5地点 溝状遺構2条
 柱穴多数

第6地点 土塼3基
 溝状遺構4条
 柱穴多数

いずれも調査区に限られているため、遺跡の性格など十分に把握し得なかったが、少なくとも第5地点では種多田遺跡を含む6世紀後半代の集落が想定できるし、第6地点では13世紀前半の遺跡が展開することが推定される。

遺物 第5地点 須恵器（坏、甕等）、土師器

第6地点 須恵器（坏、甕、横瓶等）
 瓦器（椀、鉢等）
 白磁

第5地点は6世紀後半代、第6地点では、7世紀前半と13世紀前半の所産である。



▲第5地点



▲第6地点



犬丸川流域遺跡群第5地点全景（南側より）



犬丸川流域遺跡群第5地点S D01遺物出土状況

10. 佐知久保畑遺跡

所在地 下毛郡三光村大字佐知
 調査原因 流通団地建設
 調査期間 920210～920218
 調査主体 三光村教育委員会

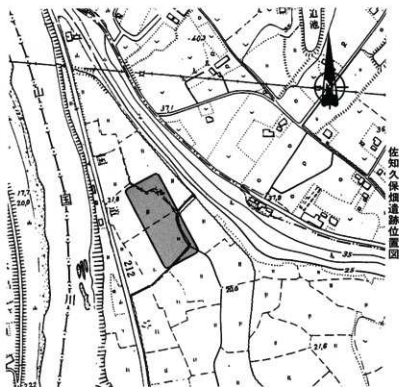
調査面積 900㎡
 担当者 植田 由美
 処置 平成4年度本調査

遺跡は山国川東岸に形成された河岸段丘上にあり、標高約20mを測る。この遺跡の調査は平成2年度から行われており、現在までに25ヵ所の試掘坑を設定して調査を行ってきた。調査の結果調査予定地区の3/4は、圃場整備事業などで既に遺跡の価値を失っている。しかし、旧地形を止めている地点では遺構の保存状態もよく、平成3年度に本調査を予定している。

文献：植田由美『三光地区遺跡群発掘調査概報』Ⅱ
 1992、P12～13。



佐知久保畑遺跡位置図



佐知久保畑遺跡位置図

11. 諫山遺跡B・C地区

所在地 下毛郡三光村大字原口字卯平ノ池
調査原因 育苗施設建設
調査期間 911016～911206
調査主体 三光村教育委員会

調査面積 700㎡
担当者 植田 由美
処置 調査後破壊

位置 山国川東岸中流域の洪積世台地上にあり、標高約30mを測る。遺跡の西側は河川の浸食作用によって段丘状の地形をなし、山国川に向かって大きく落ち込んでいる。眼下に広がる平野部との比高差は約15mである。

遺構 弥生時代：溝1・竪穴土坑3

石蓋土墳墓14

石蓋土墳墓は、低いマウンドをもつことが、土層により確認されている。

遺物 竪穴土坑からは、中期の土器が出土している。石蓋土坑墓からは、ガラス製の玉1点他、黒曜石片などが出土している。

まとめ 遺構、遺物からみて、大規模な弥生時代の集落が形成されていたことが確認された。



諫山遺跡位置図



C地区 石蓋土墳墓



C地区 土坑

12. ^{ほかの}外園遺跡

所在地 下毛郡三光村大字白木字外園
調査原因 遺跡の崩壊
調査期間 911024～911025
調査主体 三光村教育委員会

調査面積 1㎡
担当者 植田 由美
処置 調査後破壊

位置 八面山西側の丘陵上にある。周囲を
集落と谷に囲まれている。周辺には、
白木古墳群などの遺跡も点在している。

遺構 葬棺1基
すでに丘陵の斜面部から葬が割れた
状態で出土している。

遺物 和鏡1点
中心に亀、その左側に2匹の鶴
を配し周りに松、流水をめぐらせ
ている。

玉類48点
大半がガラス製。他水晶製の切
り子玉等がある。
銅製チャンカラ1対

まとめ 今回の調査は葬棺の調査のみであつ
たため周辺の遺構の状態が確認されて
いないが、古墳時代から中世にかけて
の遺跡が存在していることは確認され
た。



外園遺跡位置図



葬棺出土状態



遺物出土状態

文献：植田由美「三光地区遺跡群発掘調査概報」II
1992 P7～9。

13. 美濃尾遺跡

所在地 下毛郡三光村大字森山字美濃尾
調査原因 工場建設
調査期間 911219～920331
調査主体 三光村教育委員会

調査面積 10,000㎡
担当者 植田 由美
処置 調査後破壊

位置 八面山から中津平野に向かって北西側に延びる丘陵のはは先端に位置し、標高は約80mを測る。遺跡からは中津の町並みも見る事ができる。

遺構 弥生時代：貯蔵穴1・土坑
 古墳時代：古墳1

遺物 古墳の石室からはガラス製小玉、鉄鏃等が出土している。古墳の周辺からは提瓶等の土器も出土している。

まとめ この丘陵上には古墳が点在しており、今回調査を行った古墳の西側にも2つの円墳が築造されていた。これらの古墳はこの地方の累代墓と考えられる。



美濃尾遺跡位置図



倉泊平1号墳

14. 塔ノ熊鹿寺第3次調査

所在地 下毛郡三光村大字西林字塔ノ熊
調査原因 学校建築
調査期間 910626～910909
調査主体 三光村教育委員会

調査面積 3,700㎡
担当者 植田 由美
処置 調査後破壊

位置 八面山から岡防灘に向かってのびる丘陵が大丸川と接する標高約50mの位置に所在する。この遺跡は丘陵のほぼ先端部にあり、眼下には林地区の水田地帯が広がっている。

遺構 縄文時代：土坑1
 奈良時代：溝1・土坑
 掘立柱建物跡1

遺物 溝からは新羅系軒丸瓦、凹面布目平瓦、丸瓦、ふいごのはぐち、瓦塔片、土器等が出土している。

まとめ 平成2年は遺跡の南側半分の調査を行い、平成3年は残りの北側半分の調査を行った。出土遺物の量、また種類などから寺の金堂にあたる建物は遺跡の南側に、生活空間は遺跡の北側、丘陵の先端部のほうに位置していたと思われる。



塔ノ熊鹿寺位置図



軒丸瓦出土状況



遺構発掘状況

15. ^{しもやかた}下屋形遺跡

所在地 下毛郡本耶馬溪町大字下屋形
調査原因 園場整備
調査期間 920123～920330
調査主体 本耶馬溪町教育委員会(本調査)

調査面積 1,370m²
担当者 小林昭彦・富田修司
処置 調査後破壊
 大分県教育委員会(試掘)

調査は、屋形川左岸の広い段丘上を対象として実施した。付近の周知遺跡としてはこの川の上流約1kmに粉洞穴が位置する。

遺構の確認は、工事対象地全域に重機を用い10m～20m間隔のトレンチを設定、必要に応じてトレンチを拡張して行う方法をとった。

調査の結果、微高地に弥生時代中～後期の住居跡、柱穴群、溝などの遺構と低地の砂層中に縄文時代の遺物包含層を確認した。また対象地には縄文時代後期から中世の各時期の土器類が散布していた。

本調査は、工事に伴って掘削を受ける範囲について実施することとした。調査予定面積は1haである。このうち下流側2,000m²については今年度本調査を実施した。

文献：小林昭彦「下屋形遺跡」『大分県内遺跡詳細分布調査概報』11 1992 P7。



下屋形遺跡位置図

16. ^{しもとぼる}下戸原遺跡

所在地 下毛郡耶馬溪町大字戸原字下戸原
調査原因 県営園場整備
調査期間 911111～911115
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 100m²
担当者 後藤 一重
処置 現状保存

遺跡は山国川沿いに発達した段丘右岸にあり、山国川に向い緩やかな傾斜を呈する。調査は削平予定部分を中心に2×2mの調査グリッドを設定し実施した。その結果、山国川に近い比較的平坦な場所縄文後期鐘崎式の良好な包含層が確認された。包含層は表土下80cmにあり大形破片も含まれており、住居跡などの遺構である可能性もある。

遺跡の取扱いについて、県中津下毛地方振興局耕地課と協議した結果、工事扱いが包含層まで達しないことが分り現状保存されることになった。

文献：後藤一重「下戸原遺跡」『大分県内遺跡詳細分布調査概報』、11 1992 P6。



下戸原遺跡位置図

17. 田良川遺跡

所在地 下毛郡山国町大字草元字田良川
調査原因 圃場整備
調査期間 911012～911020
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 200㎡
担当者 坂本 嘉弘
処置 計画通り工事

遺跡は福岡県との県境を流れる山国川沿いの河岸段丘上にあり、田良川の集落を通る街道は英彦山へ続いている。また、この地区には江戸時代に採掘を始めた草本金山があり、1944年頃まで断続的に金鉱石を掘り出していた。

調査は県内詳細分布調査の際、水田で土器片や姫島産黒曜石を採集したため実施したもので、試掘坑を25ヵ所設定して実施した。その結果、金鉱石を掘るための施設に破壊され、遺跡の価値を失っていることが判明した。

文献：坂本嘉弘「田良川遺跡」『大分県内遺跡詳細分布調査概報』11 1992 P 8。



田良川遺跡位置図

18. 狩宿遺跡

所在地 下毛郡山国町守実字狩宿
調査原因 農業基盤整備
調査期間 910513～910514
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 100㎡
担当者 坂本 嘉弘
処置 計画通り工事

遺跡は福岡県との県境を流れる山国川沿いの河岸段丘上にあり、田良川の集落を通る街道は英彦山へ続いている。また、この地区には江戸時代に採掘を始めた草本金山があり、1944年頃まで断続的に採掘していた。

調査は、分布調査の際、水田で土器片や姫島産黒曜石を採集したため実施したもので、試掘区を25ヵ所設定した。しかし、1940年代の草本金山採掘の際の従業員のため住宅施設や鉱山施設建設のため削平を受けており、遺跡としての価値を失っていた。

文献：坂本嘉弘「狩宿遺跡」『大分県内遺跡詳細分布調査概報』11 1992 P 8。



狩宿遺跡位置図

19. 室田遺跡

所在地 宇佐市大字佐野字室田
調査原因 学校建築
調査期間 910806～910815
調査主体 宇佐市教育委員会

調査面積 300㎡
担当者 林 一也
処置 調査後破壊

位置 宇佐市の西端に位置する長峰地区には、北に延びる丘陵が幾条も存在している。その丘陵の間には肥沃な水田が広がっている。遺跡は地区の中央に延びている丘陵の先端部分に立地している。

遺構 古墳時代：掘立柱建物4、溝1
 掘立柱建物は溝に隣接し、主軸方位はほぼ同じである。3棟の重複がある。溝は方形状を呈し調査区外に延びる。

遺物 土師器・須恵器の破片がほとんどであるが、溝より7世紀代の須恵器（杯・高杯・コップ状土器）などが出土している。

まとめ 遺構は校舎予定地の東側部分のみで検出された。その西側は明治時代以降の校舎建設等による造成により破壊されていた。



室田遺跡位置図



調査区全景（南より）

20. ^{みつおか}光岡城跡

所在地 宇佐市大字赤尾字光岡
調査原因 史跡整備
調査期間 920120～920229
調査主体 宇佐市教育委員会

調査面積 2,700㎡
担当者 小倉 正五
処置 調査後整備

位置 宇佐平野西側の標高約130mの丘陵上に立地し、北東側谷部には館跡の土塁の一部が残存している。城跡からは宇佐平野が一望にでき、その遠方には国東半島や周防灘、および山口の山なみや工業地帯が見渡せる。

遺構 堀・土塁・石垣・虎口・掘立柱建物5・柵列6・槽跡1・櫓台1

主要遺構は昨年度までの調査で確認されていたが、本年度調査区の北側堀内において堀が折り曲げられていることがわかった。また、現在土塁のない郭北側部分において土塁の痕跡が検出された。

遺物 3ヵ年におよぶ調査を実施したものの、城の存続時期を示す遺物は出土していない。

まとめ 城の規模としては特筆するものはないが、堀や土塁などの構造には注目されるものがある。これは、戦国期における地方豪族である赤尾氏の政治的緊張状態を示すものといえる。

文献 『宇佐の文化』31 1991
宇佐の文化財を守る会



光岡城位置図



光岡城全景

21. 小部遺跡8次調査

所在地	宇佐市大字荒木字小部	調査面積	約60㎡
調査原因	重要遺構の確認	担当者	佐藤良二郎・段上 智代
調査期間	920205～920331	処置	調査後埋め戻す
調査主体	宇佐市教育委員会		

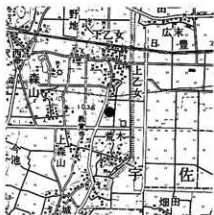
位置 駅館川西方に広がる沖積地に接した低位段丘の東端部に立地する。昭和45年頃、酒津式土器などが周辺地より出土したことから、市内でも数少ない古式土師器を出土する遺跡として知られるようになった。現状は畑地であるが、圃場整備や幹線道路の整備により遺跡のある畑地が宅地化されつつある。

遺構 昭和58年以降、7次の調査を実施しており、箱式石棺を主体部とする5C頃の方形環溝墓や布掘溝・方形区画施設が伴う古墳時代前期の環溝居館跡などの遺構の分布が明らかになった。8次調査では2カ所に設定したトレンチで環溝の北側部分とみられる幅約1.5m、深さ約0.65mの溝を検出した。他に、9C頃の土器とともに焼土塊が出土する土坑1基を検出した。

遺物 環溝の一部と考えられる溝からは、布留式古段階の特徴を有する器台・高坏・椀・壺・甕など多量の土器が出土した。特に器台や高坏など非日用的土器が多く含まれる。土坑からは9C頃の土師環・皿や内黒土器、蛸壺などが出土。

まとめ これまでの調査により環溝遺構のプランや規模は、方形プランを呈す定型化したものではなく、弥生後期の環溝集落の特徴を有していることがほぼ明らかになった。しかし、布掘溝が伴うことや出土遺物の時期などは日田市小部辻原遺跡例の方形定型化プランのものに類似の特徴である。

文献：佐藤良二郎『宇佐地区遺跡群発掘調査概報—川部遺跡・小部遺跡8次—』1992 P9～15。



小部遺跡位置図



小部遺跡調査トレンチ

22. 京塚古墳群 きょうづか

所在地 宇佐市大字高森字京塚
調査原因 遺構確認
調査期間 910819～911225
調査主体 宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

調査面積 3,000㎡
担当者 真野和夫・小柳和宏・岡 嵩
処 置 埋め戻し保存

位 置 駅館川右岸の河岸段丘上、宇佐風土記の丘の敷地内東部を占める丘陵上にある。標高35m。戦後の開墾によって畑地となったところ。前方後円墳赤塚古墳は北側約100mの位置にある。

遺 構 方形墳 4基
 円形墳 3基
 土壌墓 4基

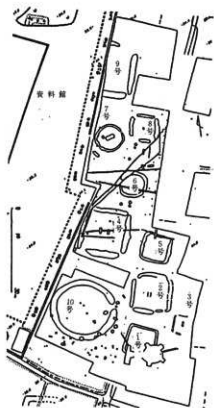
5世紀後半を中心とした時期の低墳丘の古墳群。上部が削平されて周溝のみ確認したものが多い。古墳の規模は方形墳・円形墳とも7m～17mのものまで大小あり、周溝にブリッジをもつのが特徴。主体部が完全に残っていたのは円形墳の7号墳一基のみで主体部は石蓋土墳。

遺 物 ほとんどの古墳の周溝から土器を出土。土師器の高杯が多いが6号円形墳からは古式の須恵器甕が出土。7号墳主体部からは金環・櫛・鉄鏡が出土した。

まとめ 川部・高森古墳群のひろがりとして5世紀後半代の古墳群の実態が明らかとなった。



京塚古墳群位置図



1～3号墳は1990年度調査

23. 川部遺跡

所在地	宇佐市大字川部	調査面積	約90,000m ² (対象地)
調査原因	宇佐市総合運動場建設	担当者	佐藤良二郎・川谷 浩
調査期間	910401～920331	処置	現状保存(一部破壊)
調査主体	宇佐市教育委員会		

位置 遺跡は市域中央部を貫流する駅館川の東側台地上に立地している。北隣接地は4～6Cの前方後円墳群を中心にした国指定史跡「川部・高森古墳群」であり、南側は弥生中期の環溝を伴う拠点集落である東上田遺跡と接している。周辺には弥生中期の墳墓群を知られる野口遺跡・稲尻遺跡などが分布している。

遺構 弥生前期末～中期初頭の環溝を伴う集落(住居跡・貯蔵穴・土坑)や列状に分布した墳墓群・祭祀土坑、弥生後期後半～古墳初頭頃の集落、古墳後期の集落、5～6Cの方形周溝墓や円墳など多数。

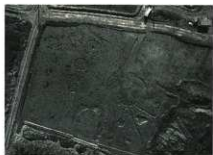
環溝は幅3～4m、深さ1m、底面の幅1.3mで断面が逆台形を呈する。一部のみの検出のため遺物は少量。

遺物 環溝や貯蔵穴を主体に弥生前期末頃の下城及び如意形口縁甕、壺(板付IIb)などが出土。祭祀土坑は中期初頭～前半の壺を主体とする。中期後半は銚先口縁や丹塗りの甕・壺・高環などが甕棺及び住居跡より出土。後期の遺物は微量。古墳時代の遺物は初期須恵器や埴輪(円筒・家形など)などが5C中頃～後半の方形周溝墓より出土。円墳は主体部を失っており、周溝より6C中～後半の須恵器が少量出土する。

まとめ 東上田遺跡の北隣接地に環溝を有する集落が発見されたことは、駅館川流域における弥生時代のムラの規模や変遷、さらに集落と墓地の関係などを知る上で貴重な成果であった。また中小の低墳丘墓が多く発見されたことは、川部・高森古墳群の墓域の形成や身分関係などを明らかにする上でも貴重な成果であった。



川部遺跡位置図



川部遺跡遺構検出状況



川部遺跡環溝出土状態

24. 野口遺跡5次調査

所在地	宇佐市大字川部字野先	調査面積	590㎡
調査原因	送電線鉄塔建設	担当者	川谷 浩
調査期間	920312～920331	処置	調査後一部破壊
調査主体	宇佐市教育委員会		

位置 駅館川東岸台地上にあり、標高は約30m前後である。周辺には弥生前期～中期の拠点的な集落として知られる東上田遺跡や川部遺跡（いずれも環溝を有する集落）、また弥生中期の墳墓約70基からなる極灰遺跡などがある。遺跡は、弥生時代中期を中心時期とした墳墓群や中世の溝などからなる。昭和53～58年の調査で東西150m、南北30mの帯状に分布した約300基の墳墓が検出されており、本調査区は、公有化して保存した地区の北側に位置する。



野口遺跡位置図

遺構 土墳墓 27基
土器蓋土墳墓 2基
石蓋土墳墓 1基
祭祀土坑 5基

遺物 弥生時代中期後半の土器が主体で、広口壺、鋤先口縁を有する丹塗りの高坏や甕など。



野口遺跡5次調査区全景

まとめ 帯状に分布した墳墓群の北側縁辺の一部を調査した。墳墓が切り合うことや、祭祀土坑に掘り込まれるものがあることなどは、造営期間の長さや「墓域」の規制を反映したものであろう。

25. 東上田遺跡(第7次発掘調査)

所在地	宇佐市大字上田字坂ノ上	調査面積	約1,000㎡
調査原因	工場増築	担当者	佐藤良二郎・江藤 和幸など
調査期間	910401～910925	処置	工事未着工
調査主体	宇佐市教育委員会		

位置 弥生時代前・中期の大規模環溝集落遺跡。宇佐平野の中央部を貫流する駅館川中流域の東岸台地に立地する。南側には同時期の集落遺跡である高居・鷹居神社境内遺跡、北側には同時期の環溝集落などからなる川部遺跡が隣接する。

遺構 (竪穴住居跡)：6軒を検出。内訳は大型円形3・小型円形2・小型方形1、中期後半の土器や石包丁などの石器が出土。

(掘立柱建物) 6棟(弥生～古墳時代)

(円形土坑群又は大型掘立柱建物)：直径・深さとも1～2m程度を測る円形土坑が多く出土している。調査区東端には4基の土坑が2列に整然と並ぶものがあり、1間×3間の大型掘立柱建物のようにも見える。しかし柱間が5mを超えるなど建物と断定し難い点も多い。土坑断面は袋状を呈さず、少量の中期前～後半の土器を伴う。

(環溝)：検出面の幅約5m、深さ0.8m、断面は逆台形を呈する。長さ約60mを発掘。出土する土器は中期の前半～後期前半。

(そのほか各種不定形土坑など)

遺物 朝鮮系無文土器を含む各種土器、石包丁、石斧などの石器、土製勾玉など。

まとめ 既往の調査と総合すると、駅館川の崖面に生じた南北の谷を結ぶ南北約450mの環溝が復原される。工場建設によって多くは破壊されているが保存状態の良い部分も存在することが確認された。



東上田遺跡位置図



東上田遺跡第7次調査区全景

26. 向山古墳

所在地 宇佐市大字山下字真応寺山
調査原因 土取り造成
調査期間 910601～910831
調査主体 宇佐市教育委員会

調査面積 約400㎡
担当者 佐藤良二郎・川谷 浩
処置 保存で協議中

位置 四日市台地西端部の標高約60mの丘陵上に立地する。伊呂波川が貫流する横山谷に面しており、近接して4基の小円墳がある。また北に連なる丘陵端部には、桐ヶ追、久々姥古墳群や糸口遺跡の方形周溝墓群などがある。さらに谷を挟んで対面する丘陵崖面には横穴墓群が分布しており、両者の関係や集落地が比定できる横山谷水田部の今後の調査が期待される。



向山古墳位置図

遺構 墳丘径約18mの小円墳。墳頂部は後世の破壊を被るが、比較的遺存状態は良好である。腰石に巨石を据え、両袖を有した横穴式石室墳である。墳丘は地山成形後に盛られている。墳丘祭祀は明らかでない。



向山古墳全景

遺物 玄室や羨道部から須恵器の他、馬具・鉄鏡・ガラス玉などが出土し、前庭部から鉄鏡や玉類が出土した。さらに周溝より須恵器が出土している。

まとめ 出土遺物の年代は6C中頃から後半であり、時期幅や前庭部の遺物出土状況を考慮すると追葬が行われた可能性がある。

27. 中原遺跡

所在地	宇佐市大字中原	調査面積	約8,000㎡
調査原因	道路改良	担当者	佐藤良二郎・江藤和幸・久恒章子
調査期間	910401～910630	処置	調査後破壊
調査主体	宇佐市教育委員会		

位置 駅館川西岸の自然堤防上に立地する。川はこの地点より緩く蛇行しており、遺跡周辺は河川の氾濫などによる旧河道状の地形がみられる。遺跡はこの河道に挟まれた微高地上にあり、近年、西隣接地の穴井遺跡で奈良～平安時代の建物跡や墨書及びへら銘土器が出土したことや、別府遺跡で大形建物の柱穴が発見されていること、さらに「駅館」の地名が示すように古代宇佐駅の比定地であることなど、この一帯が郡衙等の公的施設の位置した場所と考えられている。

遺構 縄文時代：大形土坑2、集石遺構2、包含層
 弥生時代：竪穴住居2、土坑7、溝1
 古墳時代：竪穴住居12、土坑1、掘立柱建物？
 奈良・平安時代：掘立柱建物15、土坑10、溝4
 中世(15～16C)：土坑4

掘立柱建物跡は2×2の総柱建物を含めて15棟が明らかであるが、古墳時代のもが含まれる可能性がある。

遺物 縄文時代の遺物は早期の押型文土器に先行する無文や条痕文土器。

弥生時代の遺物は下城式土器や板付Ⅱb式とされる前期末の様相を呈する土器群とともに韓国入室里遺跡などの土器と形態が類似した鉢形土器など。

古墳時代の遺物は6世紀後半から7世紀前半を主体にした須恵器や鎌・鏃などの鉄器数点。奈良・平安時代の遺物は「之乃」や「常上」と判読できるへら銘土器など。

まとめ 押型文土器に先行する遺構・遺物の発見や駅館川西岸低地の弥生前期集落の調査は、該期遺跡の在り方を考えるうえで大きな成果である。また古墳時代以降の遺構・遺物の内容は、この地区一帯に比定される官衙的集落に相応しい重要なものであった。



中原遺跡位置図



中原遺跡中心部全景

28. ^{しもばやし}下林遺跡

所在地	宇佐市大字山本字下林	調査面積	約12,000㎡
調査原因	道路建設	担当者	小倉正五・林一也・江藤和幸
調査期間	910401～920331	処置	調査後破壊
調査主体	宇佐市教育委員会		

位置 駅館川の市域上流部左岸の段丘（Ⅳ区）及びそれに接した低台地（Ⅰ～Ⅲ区）上に立地している。この台地上には旧石器・縄文時代の石器類を出土する切寄遺跡や天正年間の城跡である山本切寄などがある。また台地東側低地の集落内には白鳳寺院である虚空蔵寺跡があり、現在塔跡が県指定史跡となって残されている。

平成3年度はⅡ・Ⅳ区の調査を実施した。

遺構 Ⅱ区では縄文時代早期の土坑多数、古墳時代後期の住居跡2軒、16～17Cの集落に伴う溝・土坑・柱穴群、さらに塚1基などである。

Ⅳ区では縄文時代早期の土坑3基、奈良時代の掘立柱建物跡2棟や土坑2基・井戸状遺構1基、16～19C前半の集積土坑・埋カメ・溝・石列など集落に関する遺構を検出した。

遺物 Ⅱ区では、縄文時代の土坑から早期の特徴であるノッチの深い楕形鏝や楕円押型文土器など。古墳時代住居跡からⅢb期の須恵器数点、中・近世の遺物は土師質・瓦質土器や陶磁器類などである。Ⅳ区では、縄文時代の土坑から山形押型文土器、中・近世の遺構から瓦・瓦質土器・陶磁器類などが出土した。

まとめ 調査の機会が少なかった地区であり、縄文時代早期の遺物を伴う遺構や古墳時代集落の発見は大きな成果であった。また虚空蔵寺跡の寺域範囲や山本地区の中・近世～現代の集落変遷の一端を知る遺跡である。

文献：林一也・江藤和幸『下林遺跡——鞍国道10号宇佐道路埋文調査概報Ⅲ』1992。



下林遺跡位置図



下林遺跡（Ⅳ区）全景

30. 切寄遺跡

所在地 宇佐市大字山本字切寄
調査原因 道路建設
調査期間 901201～901231
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 2,500㎡
担当者 小林昭彦・原田昭一・後藤晃一
処置 平成4年度以降に本調査

位置 周防灘にそそぐ駅館川中流域の左岸に位置している。駅館川を中心にした宇佐平野の要の位置にあり、切寄の台地から南側谷部に下る斜面上の地形にある。この北方には白鳳時代創建の虚空蔵寺跡や虚空蔵寺窯跡などを中心にした遺跡群がある。

遺構 IV区においては路線内に3基の窯跡が確認できた。2・3号窯跡は焼けて赤変した窯壁がわずかに残るのみであるが、1号窯跡は残りがよく、窯跡内には瓦の残存も確認できた。また、IV区の下方斜面にあたるⅢ区では灰原も確認できている。

遺物 灰原から多量の瓦類が出土している。その大部分は平瓦・丸瓦であるが、なかには川原寺系面遠窟歯文縁複弁七葉軒丸瓦や法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦の破片も含まれ、これらの遺物は虚空蔵寺創建当時のものであることがわかる。

まとめ 虚空蔵寺創建時の窯跡が虚空蔵寺に隣接する虚空蔵寺窯跡のみではなく、切寄遺跡においても少なくとも3基確認できており、これらの窯跡群は南にのびる可能性もある。それゆえ数箇所の窯において焼成されていることが明らかとなり、古代寺院築造に際して瓦の需給関係を解明するひとつの指標となった。



切寄遺跡位置図

文献：原田昭一「一般国道10号宇佐別府道路埋文調査概報」Ⅳ 1992 P 3～6。

31. サヤ遺跡

所在地 宇佐市大字山本字サヤ
調査原因 道路建設
調査期間 910515～920315
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 14,800㎡
担当者 小林昭彦・原田昭一・後藤晃一
処置 調査後破壊

位置 周防灘にそそぐ駅館川中流域の左岸に位置している。駅館川を中心にした宇佐平野の要の位置にあり、宇佐平野を見下ろす丘陵地帯縁辺部の谷の入り組んだ地形にある。この北には白鳳時代創建の虚空蔵寺跡を中心とした遺跡群が広がる。

遺物 I～IV区のいずれの調査区でも遺構の確認は行えず、遺物包含層及び表土中より遺物が出土したのみであった。

I区北調査区では表土中より瓦・土師質土器が、また南調査区では表土中より布目瓦・須恵器短頸壺が出土しており、その下層の縄文時代早期の遺物包含層から無文土器が多量に出土している。

II区でも表土中より200点以上の石匙・搔器・尖頭形石器・槍先状尖頭器・石錐・ラウンドスクレイパー・礫器などが出土しており、いずれも縄文時代に属するものであろう。

III区では縄文時代の石器類をはじめ縄文時代早期の無文土器、同晩期の甍形土器、弥生時代調査区中期の土器類、さらには18世紀の陶磁器類も出土している。

IV区では見晴らしのよい丘陵尾根上の地表面から8世紀前半代の須恵器坏身が5個体分出土している。これらの坏身の底部には「稲」をはじめへラ書き文字が記されている。



サヤ遺跡位置図

32. ^{ふるわたり}古渡遺跡

所在地 宇佐市大字山本字古渡

調査原因 道路建設

調査期間 920110～920131

調査主体 大分県教育委員会

調査面積 37,000㎡

担当者 原田昭一・後藤幹彦

処置 調査後破壊

周防灘にそそぐ駅館川中流域の左岸に位置している。駅館川を中心とした宇佐平野の要の位置にあり、宇佐平野を見下ろす丘陵地帯縁辺部であるとともに鷹栖観音堂の存在する断崖絶壁上の尾根筋にあたる。この尾根筋は北側の山本城跡、鷹栖山城跡から南側の妙見城にいたる道筋にあたり、中世以降の古道周辺がいかなる状況を呈していたか興味もたれるところであったが、昭和40年代に重機により畑造成が行われており明確な遺構・遺物の検出はできなかった。

文献：原田昭一『一般国道10号宇佐別府道路埋文調査概報』Ⅳ 1992 P13～14。



古渡遺跡位置図

33. 史跡宇佐神宮境内^{しんじょうほう}(真乗坊跡)

所在地 宇佐市大字南宇佐字宮迫

調査原因 家屋改築工事など

調査期間 910513～911228

調査主体 宇佐市教育委員会

調査面積 約100㎡

担当者 佐藤・川谷・小倉など

処置 調査後一部破壊

位置 史跡宇佐神宮境内は御許山山頂、現宇佐神宮境内、及び宮迫地区よりなる。宮迫地区は神宮上宮などが鎮座する小椋山とその南に迫る丘陵に囲まれており、弥勒寺社僧の出た26坊(近世)の跡地の景観をとどめる。現状は水田・宅地となっているが、往時の地割りの基本をなした南北に伸びる3本の道や、宇佐宮に大きな勢力をもった真乗坊(栄興寺)・永松院の石垣や土塀、門などの遺構がわずかに残っている。

まとめ 真乗坊住職の後裔である真上氏の家屋増築及び宅地内道路建設のための発掘調査。

近世の整地層の下から、掘立柱建物の柱穴

群、井戸状土坑、石垣などの遺構、それにともなう13～15世紀の土師器環・小皿・瓦器碗など中世の遺物を検出した。遺跡保護のため盛土工法などの計画変更を行った。



真乗坊跡位置図

34. 史跡宇佐神宮境内(宮司邸旧勅使斎館)^{ちきくしさいかん}

所在地	宇佐市大字南宇佐字下馬場	調査面積	約300㎡
調査原因	家屋改築工事	担当者	乙呷政巳・佐藤良二郎など
調査期間	920205～920502	処置	調査後一部破壊
調査主体	宇佐市教育委員会		

位置 東側の大尾山、西側の西山の各丘陵と北側の寄藻川に囲まれた地域が宇佐神宮境内である。到津宮司邸は境内の北端部、寄藻川の南岸に接した位置に存在しており、堀や土塁・塙に囲まれた中世居館の面影を残す。勅使斎館は宮司邸の南側に建っており、大正14年に宮司邸の建物を改造したものである。

遺構 建物の床下には近・現代の遺物が散布し、礎石群が据えられた下部は50～70cmの砂混じりの整地層が確認された。礎石は高低差や平面プランの違いから時期差が考えられるが、遺物のほとんどは染付など近世のものであった。その下部には地山を掘り込んだ掘立柱建物の柱穴や土坑、それに伴う12～15世紀の土器・陶磁が検出された。

遺物 染付などの近世陶磁類、多くの寛永通寶に混じって、二分金、雁首銭が各1点発見された。また、青磁・白磁など中世の陶磁類、土師器・瓦器などが出土。

まとめ 大宮司到津氏の居館の歴史は、文献史料によれば江戸時代前期には確実に存在しているものの、中世まで遡及するか否かは不明である。今回の調査により、近世はもちろん中世の遺構、遺物も検出することができた。しかし小規模調査の資料であり、これらが宮司居館に関係するものであるとは決めがたい。今後の調査が期待される。



宇佐神宮境内宮司邸位置図



宮司邸勅使斎館調査区全景

35. ^{こさか}小坂遺跡

所在地	宇佐郡院内町大字小坂	調査面積	1,000㎡
調査原因	道路建設	担当者	原田 昭一
調査期間	911015～911114	処置	調査後破壊
調査主体	大分県教育委員会		

周防灘にそそぐ駅館川の支流である恵良川の右岸に位置している。重機により表土の除去を行うとその下には地山である黄褐色砂質土が広がっており、明確な遺構・遺物包含層の確認はできなかった。なお表土中より数点の縄文時代の無文土器が出土している。



小坂遺跡位置図

文献：原田昭一「一般国道10号宇佐別府道路埋文調査概報」Ⅳ 1992 P15。

36. ^{そま}副地区

所在地	宇佐郡院内町大字副	調査面積	500㎡
調査原因	公共施設建設	担当者	吉田 寛
調査期間	920228～920301	処置	予定通り工事
調査主体	院内町教育委員会		

副地区は宇佐郡院内町大字副に所在する。調査は院内町立の公共施設建設に伴う試掘調査である。調査区は副城と呼ばれる中世山城の麓に位置し、中世城郭関連の遺構・遺物の発見が期待される地点であった。調査は重機と人力を併用し、複数のトレンチを掘り下げたが、表土下20～30cmで地山にあたり、何らの遺構・遺物も認められなかった。調査後は予定通り工事が行われた。



副地区位置図

37. 宮ノ原遺跡(三女神社境内)

所在地 宇佐郡安心院町大字下毛字宮ノ原・三柱
調査原因 倒木
調査期間 911016～911125
調査主体 安心院町教育委員会

調査面積 約100㎡
担当者 野 勝教
処 置 調査後現状保存

位 置 遺跡は安心院盆地の北側の標高 130m の小台地上に所在する。台地の南側は深見川に浸蝕された断崖となっている。台地の北側は幅約50mの浅い谷がめぐっている。

宮ノ原遺跡は昭和55年～同58年にかけて発掘調査が実施され、弥生時代前期～古墳時代前期にかけての遺跡であることが確認されている。現在は町指定の史跡として保存されている。



宮ノ原遺跡位置図

遺 構 古墳時代：石棺 6基

内面朱塗り

倒伏した樹木の根に溝状の遺構があり多数の土器を検出。

遺 物 弥生時代の土器片が出土。

まとめ 境内全域に石棺が分布していると考えられ、この地域一帯は遺跡北側の大平石棺群とともに古墳期の拠点的な墓域であった可能性が高い。

38. ^{ほろ}原遺跡

所在地 宇佐郡安心院町大字原
調査原因 圃場整備事業
調査期間 911024～911030
調査主体 安心院町教育委員会

調査面積 4,000㎡
担当者 野 勝教
処 置 計画通り工事

遺跡は、東から北へと蛇行して流れる津房川を臨む河岸段丘上に位置する。付近の遺跡としては、北大バイパス建設に伴って調査が行なわれた小原南遺跡が南側対岸丘陵上にある。また、東側対岸には弥生土器の散布地である飯田遺跡がある。

調査は、圃場整備に先立ち試掘調査を実施したもので、試掘トレンチを13ヵ所設定した。その結果、4本のトレンチより柱穴を検出した。しかし、いずれのトレンチからも遺物の出土は無かった。柱穴遺構の検出深度は、いずれも工事掘削深度より深いため本調査に至らなかった。



原遺跡位置図

39. ^{みくらだ}三口田遺跡

所在地 宇佐郡安心院町大字下毛字三口田
調査原因 文化会館建設
調査期間 920317～920318
調査主体 安心院町教育委員会

調査面積 約10,000㎡
担当者 野 勝教
処 置 平成4年度本調査

遺跡は安心院盆地のほぼ中央に位置し、町の中心街の一角に所在する。盆地の中には条里遺構が残っており周知遺跡となっている。このため、遺跡の所在確認のため幅3mのトレンチ13本を設定し試掘調査を実施した。この結果、文化会館の駐車場予定地(約3,000㎡)で土溝・溝・柱穴等の遺構を検出し、9世紀頃の土師器等の遺物が出土した。このため4年度に本調査を実施する予定である。

安心院は、古代官道の駅である安覆駅の所在比定地であり、また古代の国の穀物倉庫である倉院の所在地にも比定されている。このように官衛的性格の可能性が考えられる遺跡である。



三口田遺跡位置図

40. ^{にしおおくほ}西大久保遺跡

所在地 宇佐郡安心院町大字久井田字西大久保
調査原因 工場用地造成
調査期間 920206～920313
調査主体 安心院町教育委員会

遺跡は、南側に安心院盆地を臨む標高 160m 前後の上ノ原台地にあり、平成 2 年度に調査を行なった宗禅寺遺跡の北側に隣接している。

調査は、工場用地造成に先立って実施した試掘調査である。その結果、弥生時代の溝、土壇等の遺構を検出した。また、遺物として弥生時代の瓦片、古墳時代の須恵器片等が出土している。弥生時代の拠点集落と考えられる宗禅寺遺跡の集落の北限を知ることができた。

調査面積 600㎡
担当者 野 勝教
処 置 調査後破壊



西大久保遺跡位置図

41. ^{つまがき}妻垣ムナソリ遺跡

所在地 宇佐郡安心院町大字妻垣字ムナソリ
調査原因 防火用水槽設置
調査期間 910801～910802
調査主体 安心院町教育委員会

遺跡は安心院盆地の南東に位置する妻垣山（標高 241m）の裾部に広がる妻垣台地上に所在する。この妻垣山は古来より神体山として尊崇され、この山の 8 合目に玉垣を巡らした神体石が祀られている。調査はこの台地一帯に石棺が分布しているため実施したもので試掘坑を 2 箇所設定して実施した。その結果、この地域の井堰の建設時に土砂採掘され、遺跡の価値を失っていることが判明した。

調査面積 40㎡
担当者 野 勝教
処 置 調査後工事



妻垣ムナソリ遺跡位置図

42. 宗禅寺東遺跡

所在地 宇佐郡安心院町大字新原字宗禅寺
調査原因 工場用地造成
調査期間 920110～920130
調査主体 安心院町教育委員会

調査面積 約2,000㎡
担当者 野 勝教
処置 調査後破壊

位置 遺跡は、安心院盆地の南西に見下ろす標高約160mの上ノ原台地南端に位置する。

上ノ原台地の字谷迫で、昭和40年に7本の銅矛が出土している。また、平成2年には、当遺跡の隣接する宗禅寺遺跡の調査を実施し弥生前期から古墳時代にかけての遺構を検出している。

遺構 柱穴：多数
 竪穴：1
 土塙：2

遺物 古墳時代 土師器片：多数
 須恵器片：若干

まとめ 宗禅寺東遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての宗禅寺遺跡の周辺遺跡で主に古墳時代の土塙等を検出しており、古墳時代を中心とした遺跡と考えられる。



宗禅寺東遺跡位置図

43. 笹ヶ平遺跡

所在地 宇佐郡安心院町大字笹ヶ平
調査原因 圃場整備
調査期間 911028～911106
調査主体 安心院町教育委員会

調査面積 9,000㎡
担当者 野 勝教
処 置 一部保存

遺跡は安心院町大字笹ヶ平・大字広谷に所在する。調査は、圃場整備事業に先立つ試掘調査として実施した。

調査は調査対象地が広範なため、県道と佐田川間の河岸段丘部をA地点、佐田川と広谷川に挟まれた扇状地をB地点、佐田川が南から西に還流する東側河岸段丘部の字内代をC地点とし、合計63本のトレンチを設定して調査を実施した。その結果、B地点において柱穴遺構、C地点において茶毘遺構を検出した。これをもとに、関係各機関と保存のために協議をもち工法変更等の処置により遺跡の保存をはかった。



笹ヶ平遺跡位置図

44. 尾立前田遺跡

所在地 宇佐郡安心院町大字尾立字前田
調査原因 農道建設
調査期間 920214～920215
調査主体 安心院町教育委員会

調査面積 50㎡
担当者 野 勝教
処 置 計画通り工事

遺跡は由布山系を源流とする津房川沿いの河岸段丘上に位置する。付近の遺跡として、県道を挟んで東の丘陵に中世の山城である津房村城跡がある。また、北側丘陵の中腹には、鎌倉時代末期作と推定される板碑が在る。

調査は農免農道建設事業の事前調査として実施したもので、試掘坑を5ヵ所設定して実施した。その結果、陶磁器片等の遺物が出土しただけで遺構は確認できなかった。遺物も二次堆積と考えられ遺跡の価値を失っていることが判明した。



尾立前田遺跡位置図

45. ソノ田A遺跡

所在地 豊後高田市大字来縄字ソノ田
調査原因 圃場整備
調査期間 920206～920330
調査主体 豊後高田市教育委員会

調査面積 200㎡
担当者 河野 典之
処置 調査後破壊

遺跡は応利山から桂川に向かってなだらかに傾斜する台地上に位置する。古代から中世にかけての遺物を伴う柱穴、溝状遺溝が検出された。溝状遺溝は南北にかけて4本のび、その一部は東に折れており、掘立柱建物群に伴う遺溝と思われる。



ソノ田A遺跡位置図

46. ソノ田B遺跡

所在地 豊後高田市大字来縄字ソノ田
調査原因 圃場整備
調査期間 920109～920228
調査主体 豊後高田市教育委員会

調査面積 80㎡
担当者 河野 典之
処置 調査後破壊

遺跡は先のソノ田A遺跡と同じ台地上の東部に位置している。調査は遺跡の大部分が盛土であったため削平する小面積のみ実施した。13～14世紀代の土器を伴う掘立柱建物群や中世土墳墓等が検出された。



ソノ田B遺跡位置図

47. イセダ遺跡

所在地 豊後高田市大字大力字イセダ
調査原因 園場整備
調査期間 911008～911017
調査主体 豊後高田市教育委員会

調査面積 70㎡
担当者 河野 典之
処置 一部調査後破壊

遺跡は都甲川の南西、十王谷の東部に位置する。調査は削平がさげられない部分について小面積のみ実施した。調査では、13～14世紀代に位置づけられる土師器土器、瓦器、青磁などを伴う柱穴が検出されたが、調査面積の関係から建物を復元するにはいたらなかった。



イセダ遺跡位置図

48. 小樋遺跡

所在地 豊後高田市大字松行字小樋
調査原因 園場整備
調査期間 910624～911007
調査主体 豊後高田市教育委員会

調査面積 100㎡
担当者 河野 典之
処置 盛土保存一部調査後破壊

遺跡は長岩屋川の下流都甲川と接するやまづきの台地上に位置する。排水路部分のみの小範囲の調査であったが、弥生時代中期から後期後半に位置する竪穴式住居跡が3基が部分的に検出された。規模的には隣接するスキサキ遺跡よりも大きく、この付近の中核をなす拠点集落であったことが推測される。



49. スキサキ遺跡

所在地 豊後高田市大字新城字スキサキ
調査原因 圃場整備
調査期間 910509～910831
調査主体 豊後高田市教育委員会

調査面積 200㎡
担当者 河野 典之
処置 調査後破壊

位置 都甲川に長岩屋川が合流する地点を見おろす段丘先端に位置する。ここより下流の都甲川流域は谷の中が広く、条里的地割などもみられる。遺跡からはこれらの下流域の平野部を一望のもとにできる。

遺構 縄文時代：土壌1

弥生時代：竪穴式住居跡17・壺棺1

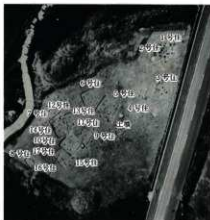
壺棺は、頸部より上を打ち欠いた壺2個体を合わせて使用したもので、内面に丹塗りが見られる。

遺物 縄文時代の後期に位置づけられる姫島産黒曜石石核、押型文の土器、弥生時代の遺物としては土器、石器の他に銅鐵、鉄鐵といった鉄器等が出土した。

まとめ 遺構の立地、規模、出土品などからみて遺跡は弥生時代後期後半から古墳時代前期のものと思われ、都甲川を挟んで向かいの小槌遺跡を拠点集落として発達していったと思われる。



スキサキ遺跡位置図



スキサキ遺跡遺構配置図

50. 智恩寺遺跡

所在地 豊後高田市大字県宇堂山他
調査原因 遺構確認
調査期間 910614～911018
調査主体 宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

調査面積 400㎡
担当者 小柳 和宏
処置 埋土保存

位置 桂川と都甲川の合流地点を望む台地先端部に立地する。最高所に講堂と六所権現、一段下った平坦地に院主坊を、そこから伸びる谷沿いにテラスを造り出し坊を形成する。台地全体が墓や可耕地も含め、中世寺院の景観を良く残している。

遺構 中世：梵鐘・鑄造土坑・掘立て柱建物・掘近世：墓地

台地全体が中世寺院の景観を留めており、現状で掘・土塁・墓地等を確認する事ができる。

遺物 梵鐘鑄型は県下で初めての出土であり注目される。全形はうかがい知れないが、縦帯・横帯・乳・駒の爪等の部分が出土。

また、遺構は不明であるが、9世紀代の瓦溜りが発見され、智恩寺創建期を知る手懸りを得た。

その他に、弥生土器・須恵器・中世土器・寛永通宝（六道銭）等が出土している。

まとめ 国東半島に点在する六郷山寺院は残された仏像等に華やかな面を見せるが、歴史学的には未解明な部分が多い。そうした中で考古学資料による六郷山の研究は新分野を開拓できるものとして期待される。それは同時に、リゾート開発等の開発行為に適切に対処するためにも必要なものである。



智恩寺遺跡位置図

文献：小柳和宏ほか『国東六郷山本山本寺智恩寺発掘調査報告』1992 宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告 9。

51. 御霊遺跡

所在地 西国東郡香々地町大字香々地字御霊
調査原因 県営圃場整備
調査期間 911216～920120
調査主体 大分県教育委員会(試掘) 香々地町教育委員会(本調査)

調査面積 500㎡
担当者 後藤 一重
処置 現状保存一部調査後破壊

遺跡は竹田川右岸の川沿いに位置する。大分県教委による試掘調査の結果、古代・中世と思われる柱穴が多数確認された。その取扱いについて県西高地方振興局耕地課などと協議を行い、工法的に保存が困難な部分につき香々地町教委が本調査を実施することとした。

本調査は約500㎡にわたり実施され、古墳時代後期の竪穴1基、9世紀および13世紀前後の柱穴多数を確認した。しかし、小面積の調査のため遺跡の性格等を明確にしえなかった。



御霊遺跡位置図

文献：後藤一重「信重遺跡ほか」「大分県内遺跡詳細分布調査概報」11 1992 P.10.

52. 土上遺跡

所在地 西国東郡香々地町大字香々地字土上
調査原因 県営圃場整備
調査期間 911216～920120
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 200㎡
担当者 後藤 一重
処置 現状保存

遺跡は竹田川右岸の自然堤防上に位置し、隣接して豊富な水量の湧水がみられる。

試掘調査は工事対象地区全域に及び、柱穴土坑などを確認した。时期的には弥生～中世までみられ、古代、中世が主体をなす。これらの遺構検出面は表土下30cm前後と非常に浅い。

遺跡の取扱いについて県西高地方振興局耕地課などと協議した結果、客土による盛土により遺跡の保存をはかった。



土上遺跡位置図

文献：後藤一重「信重遺跡ほか」「大分県内遺跡詳細分布調査概報」11 1992 P.10.

53. ^{かのしと}過ノ本遺跡

所在地 西国東郡香々地町大字香々地字過ノ本
調査原因 県営園場整備
調査期間 911216～920120
調査主体 大分県教育委員会(試掘) 香々地町教育委員会(本調査)

調査面積 500㎡
担当者 後藤 一重
処置 現状保存一部調査後破壊

遺跡は国東半島中央から派生する放射状谷の海岸近くで、竹田川右岸の自然堤防上に位置する。大分県教委による試掘調査の結果、弥生前期の土坑などが検出されたため、その取扱いについて県西高地方振興局などと協議を行い、排水路部分以外については工法変更等により遺跡が保存されることになった。

排水路部分について、香々地町教委が本調査を実施し、弥生時代h、中期の土坑、住居跡などを検出した。

文献：後藤一重「信重遺跡ほか」「大分県内遺跡詳細分布調査概報」11 1992 P10。



過ノ本遺跡位置図

54. ^{あのみき}荒牧遺跡

所在地 西国東郡香々地町大字香々地字荒牧
調査原因 県営園場整備
調査期間 911216～920120
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 400㎡
担当者 後藤 一重
処置 現状保存

遺跡は竹田川右岸の自然堤防上に位置する。海岸付近から1町方格の条里的地割がみられ、遺跡の位置するところまで地割がみられる。

試掘調査は工事対象地区全域に及び、古墳時代の住居跡、溝などを確認したが、大規模な集落であることが予想された。条里的地割についてはその成立時期などを確認することはできなかった。

遺跡の取扱いについて県西高地方振興局耕地課などと協議した結果、工法変更により遺跡は保存されることになった。

文献：後藤一重「信重遺跡ほか」「大分県内遺跡詳細分布調査概報」11 1992 P10。



荒牧遺跡位置図

55. ^{のよしげ}信重遺跡

所在地 西国東郡香々地町大字香々地字信重
調査原因 県営圃場整備
調査期間 911216～920120
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 300㎡
担当者 後藤 一重
処置 平成4年度本調査

遺跡は、細い谷が海岸平野に向い広がるその出口に位置し、海岸平野を一望できる。

試掘調査は工事対象地全域にわたりトレンチを設定した。その結果、中世と思われる柱穴を広範囲にわたり確認した。

遺跡の取扱いについて県西高地方振興局耕地課などと協議した結果、工法変更等による保存措置が困難なことが分り、その部分については平成4年度に本調査を実施することにした。

文献：後藤一重「信重遺跡ほか」『大分県内遺跡詳細分布調査概報』11 1992 P10。



信重遺跡位置図

56. ^{こじょうま}古城得遺跡

所在地 西国東郡大田村大字吉掛字古城得
調査原因 県営圃場整備
調査期間 920109～920311
調査主体 大分県教育委員会

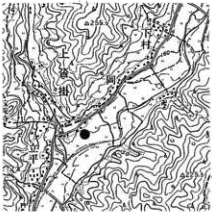
調査面積 500㎡
担当者 後藤 一重
処置 平成4年度本調査

遺跡のある国東半島は中央の両子山から細長い谷がいくつも派生する。古城得遺跡は半島内陸部の桂川右岸の河岸段丘上に位置し、付近には灰土山古墳、田原城跡などがある。

試掘調査は工事対象地区ほぼは全域にわたり調査区を設定し実施した。その結果、住居跡、土坑、柱穴などが確認された。

遺跡の取扱いについて県西高地方振興局耕地課などと協議した結果、一部については平成4年度本調査を実施することにした。

文献：後藤一重「古城得・岡ノ前遺跡」『大分県内遺跡詳細分布調査概報』11 1992 P9。



古城得遺跡位置図

57. 岡ノ前遺跡

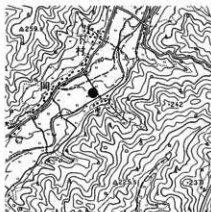
所在地 西国東郡大田村大字杵掛字岡ノ前
調査原因 県営園場整備
調査期間 911118～920110
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 500㎡
担当者 後藤 一重
処置 平成4年度本調査

両子山から派生する細長い谷の河岸段丘上に位置する。田原川をはさむ遺跡の対岸には、延元2年(1339)の刻銘がある国重要文化財の田原家五重塔がある。

試掘調査は対象地区全域にわたり調査区を設定し実施した。その結果、中世の柱穴、土坑が確認された。

遺跡の取扱いについて県西高地方振興局耕地課などと協議した結果、一部については平成4年度本調査を実施することにした。



岡ノ前遺跡位置図

文献：後藤一重「古城得・岡ノ前遺跡」『大分県内遺跡詳細分布調査概報』11 1992 P9。

東国東・別府地区(別府教育事務所管内)



58. 伊勢白遺跡

所在地 東国東郡国見町大字中宇伊勢白
調査原因 県営園場整備
調査期間 910624～910918
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 400㎡
担当者 後藤 一重
処置 現状保存

遺跡西側から海岸にかけて、1町方格の条里的地割が明瞭に残存する。遺跡は条里的地割を目前にする位置にある。

試掘調査は工事対象地全域に調査区を設定し行なった。その結果、中世と思われる柱穴を確認した。しかし、その広がりはお小範囲と予想された。

遺跡の取扱いについて県東国東地方振興局耕地課と協議した結果、工法変更により遺跡の保存をはかった。

文献：後藤一重「城屋敷遺跡ほか」「大分県内遺跡詳細分布調査概報」11 1992 P11。



伊勢白遺跡位置図

59. 森洲遺跡

所在地 東国東郡国見町大字中宇森洲
調査原因 県営園場整備
調査期間 910624～910918
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 400㎡
担当者 後藤 一重
処置 現状保存

遺跡は放射状谷のほぼ中央に位置する。伊美氏居館跡と伝称される伊美小学校の北側に続く地区であることから、試掘調査では工事対象地全域に調査区を設定した。検出された遺構は柱穴で、出土遺物から古代～中世の時期であろうと思われた。しかし、遺構密度はかなり低く、遺構の広がりもそれほど広範囲ではない。遺跡の取扱いについて県東国東地方振興局耕地課と協議した結果、工法変更により遺跡の保存をはかった。

文献：後藤一重「城屋敷遺跡ほか」「大分県内遺跡詳細分布調査概報」11 1992 P11。



森洲遺跡位置図

60. 城屋敷遺跡

所在地	東国東郡国見町大字中宇城屋敷
調査原因	県営圃場整備事業
調査期間	910624～910918
調査主体	大分県教育委員会

工事対象地区に隣接する伊美小学校は、文献史料にもしばしば登場する中世伊美氏の居館跡と伝えられている。しかし、グランド造成や校舎建設のためか、現地には居館につながる遺構は残存していない。試掘調査は全域に調査区を設定したが、小学校の東側で多量の遺物を伴い、土坑、柱穴、溝、井戸などを検出した。遺跡の取扱いについて県東国東地方振興局耕地課と協議した結果、客土による盛土などの工法変更で遺跡の保存をはかることになった。

文献：後藤一重「城屋敷遺跡ほか」『大分県内遺跡詳細分布調査概報』11 1992 P11。

調査面積	500㎡
担当者	後藤 一重
処置	現状保存



城屋敷遺跡位置図

61. 下通遺跡

所在地	東国東郡国見町大字中宇下通
調査原因	県営圃場整備事業
調査期間	910624～910918
調査主体	大分県教育委員会

遺跡は国東半島中央から派生する放射状谷の下流域に位置する。伊美川が谷の西側により、川の東側の右岸に平野が展開する。下通遺跡は東側の山沿にあり、試掘調査の結果、弥生～古墳時代と思われる住居跡1基と溝を検出した。

遺跡の取扱いについて県東国東地方振興局耕地課と協議を実施し、遺跡が広がると予想される部分について工法変更を行い遺跡の保存をはかった。

文献：後藤一重「城屋敷遺跡ほか」『大分県内遺跡詳細分布調査概報』11 1992 P11。

調査面積	400㎡
担当者	後藤 一重
処置	現状保存



下通遺跡位置図

62. ^{なかきべ}中岐部遺跡

所在地 東国東郡国見町大字中岐部
調査原因 県営園場整備事業
調査期間 910513～910830
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 500㎡
担当者 後藤 一重
処置 計画通り工事实施

当地区は中世岐部氏の本貫地で、工事対象地区外に岐部城跡や居館跡と伝えられるところがある。また、地区内には現在小学校校庭となっている縄文時代遺物を多量に出土した中岐部遺跡がある。試掘調査は、削平予定地および中岐部遺跡周辺を中心に行った。その結果、中岐部遺跡周辺の一部で姫島産黒曜石剥片がまとまり採集されたが、包含層、遺構などは確認できなかった。以上から、工事の実施にあたり問題ないと判断した。

文献：後藤一重「中岐部遺跡」『大分県内遺跡詳細分布調査概報』11 1992 P12。



中岐部遺跡位置図

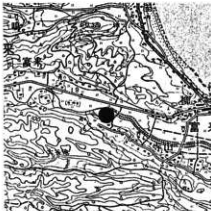
63. ^{はまき}浜崎地区

所在地 東国東郡国東町大字浜崎
調査原因 県営園場整備
調査期間 911015～911030
調査主体 国東町教育委員会

調査面積 300㎡
担当者 藤本 啓二
処置 計画通り工事

調査は工事により削平を受ける部分を対象とし、地形等の現状を勘案のうえ実施した。掘削は任意にトレンチを設定し、重機と作業員とで行った。調査の結果、表面採集による土器片等を除き、特に明確な遺構や遺物は検出されなかった。土層の堆積状況は、黄褐色粘質土を呈する花崗岩の風化土層が表土層の直下から堆積しており、地山を形成していた。

文献：藤本啓二「国東地区遺跡群発掘調査概報」Ⅲ 1992。



浜崎地区位置図

64. ワラミノ遺跡

所在地 東国東郡国東町大字大恩寺字ミノ追
調査原因 圃場整備
調査期間 910909～911003
調査主体 国東町教育委員会

調査面積 1,800㎡
担当者 藤本 啓二
処置 調査後保存

ワラミノ遺跡は、富米川の上流域右岸にある丘陵斜面の下端部に位置している。昭和34年に発掘調査が実施されており、縄文時代の後期を中心とする包含層等が検出されている。

今回の調査により検出された遺構の主体は、製鉄に関係するものであり、12～13世紀前後の時期である。国東半島において製鉄遺跡が本格的に調査されるのは、今回で2例目であり、鉄生産の実態を明らかにするうえで極めて重要な遺跡である。遺構について特記することは、製錬炉（箱型炉）に伴い精錬炉（大鍛冶炉）が検出されたことである。したがって、当遺跡においては、製錬段階（鉄塊の生産）から精錬段階（鉄塊の再製錬、または各種鉄素材の生産）まで一環した体制が取られていたこととなる。なお、今回の試掘調査地域では、当遺跡のほか約3箇所、鉄滓が集中する地域が確認された。鉄滓は、形状から製錬滓と考えられることから、当遺跡を含む富米川上流域（国東町大字大恩寺）は、古代・中世における製鉄地帯であったと考えられる。そして、ワラミノ遺跡は縄文時代と12～13世紀前後の製鉄遺構を含む複合遺跡として捕えられる遺跡である。

文献：藤本啓二『国東地区遺跡群発掘調査概報』Ⅲ 1992。



ワラミノ遺跡位置図



ワラミノ遺跡の遺構配置図

65. 千足遺跡^{せんびき}

所在地 東国東郡国東町大字北江字下千足ほか
調査原因 國場整備
調査期間 920113～920304
調査主体 国東町教育委員会

調査面積 4,000㎡
担当者 藤本 啓二
処置 調査後破壊

位置 国東町の中央部を東流する田深川の downstream 左岸にあたる丘陵上にあり、標高は約35mである。丘陵の南側は田深川により形成された沖積地であり、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の安国寺遺跡や糸里遺構が分布している。遺跡からの眺望は良く伊豫灘が一望できる。

遺構 弥生時代：土坑多数・柱穴多数
 弥生時代の遺構はすべて下城式土器（前期末～中期初頭）の時期である。

遺物 下城式甕形土器及びそれに伴う土器類。
 また姫島産黒曜石の剥片石器類や磨石、石皿等の礫器類も多数出土している。

まとめ 国東半島における同時期の遺跡としては武蔵町の熊尾遺跡がある。両遺跡の共通点は姫島産黒曜石の剥片石器類が多数出土することである。なお、今回の調査では明確な住居跡の確認には至っていない。耕作等により遺構の上部が破壊され現存しないのかどうかは不明であり、今後の検討課題である。

文献：藤本啓二「国東地区遺跡群発掘調査概報」Ⅲ 1992。



千足遺跡位置図



遺跡全景

66. ^{なかだ}中田地区

所在地 東国東郡国東町大字中田
調査原因 県営園場整備
調査期間 911007～911017
調査主体 国東町教育委員会

調査面積 400㎡
担当者 藤本 啓二
処置 計画通り工事

調査は工事により削平を受ける部分を対象とし、地形等の現状を勘案のうえ実施した。掘削は任意にトレンチを設定し、重機と作業員とで行った。調査の結果、表面採集による土器片を除き、特に明確な遺構や遺物は検出されなかった。土層の堆積状況は、河川寄りの地域で、泥炭層と砂礫層が厚く堆積しており、山際に向かうにつれ減少する傾向にあった。山際の微高地周辺では、黒褐色から褐色を呈する土層が堆積していた。

文献：藤本啓二「国東地区遺跡群発掘調査概報」Ⅲ 1992。



中田地区位置図

67. ^{いわや}岩屋遺跡

所在地 東国東郡国東町大字岩屋
調査原因 県営園場整備
調査期間 910826
調査主体 国東町教育委員会

調査面積 100㎡
担当者 藤本 啓二
処置 計画通り工事

調査は工事により削平を受ける部分を対象とし、地形等の現状を勘案のうえ実施した。掘削は任意にトレンチを設定し、重機と作業員とで行った。調査の結果、表面採集による土器片等を除き、特に明確な遺構や遺物は検出されなかった。土層の堆積状況は、表土層を取り除くと一部を除き砂礫層が厚く堆積していた。砂礫層は、当地域を流れる横手川の氾濫により形成されたと考えられる。

文献：藤本啓二「国東地区遺跡群発掘調査概報」Ⅲ 1992。



岩屋地区位置図

68. 足曳山両子寺境内

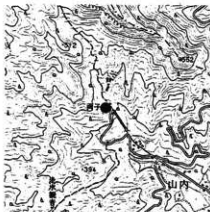
所在地 東国東郡安岐町大字両子1548番地10
調査原因 観光開発
調査期間 911021
調査主体 安岐町教育委員会

調査面積 27,075㎡
担当者 松本 啓子
処置 計画通り工事

足曳山両子寺は国東半島のほぼ中央、安岐町においては最北端に位置する。また両子寺境内には河川の一つである双子川の清流が流れ、安岐町の中央河川である安岐川に合流するまで、その距離は約13kmにおよぶ。

国東六郷満山のひとつである両子寺は、平安末・鎌倉初期以降に山岳仏教文化が栄えたところであり1988年には両子寺講堂跡が県教委により発掘されている。

今回の調査は調査対象地区に当時の坊が建てられていた可能性があったため試掘調査を行った。しかし、攪乱のため遺構、遺物を確認することはできなかった。



両子寺境内位置図

69. 中野工区

所在地 東国東郡安岐町大字明治字中野
調査原因 圃場整備
調査期間 910819～910827
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 16.6ha
担当者 牧尾義則・松本啓子
処置 計画通り工事

中野工区は、豊後高田安岐線の朝来入り口から約6.50km北へ登ったところに位置し、調査区の北側には安岐川の支流の一つである朝来野川が流れる。

この中野工区から約3km南には、久末京徳遺跡があり、宇佐行幸会の街道付近にあたるため今回試掘調査を行った。

その結果、柱穴跡を3つ、土器片を2点ほど検出したためトレンチを拡張したが、攪乱のため他の遺構や遺物を確認することはできなかった。

文献：松本啓子「朝来地区」「大分県内遺跡詳細分布調査概報」11 1992 P.12。



中野工区位置図

70. ひきすまきようたく久末京徳遺跡

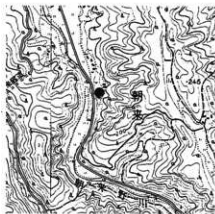
所在地 東国東郡安岐町大字朝来144
調査原因 学校建設
調査期間 910730～910731
調査主体 安岐町教育委員会

調査面積 2,500㎡
担当者 松本 啓子
処置 92年度に二次調査

遺跡は安岐川の支流の一つである朝来野川上流左岸に位置する。

今回調査となった小学校建設予定地の南側には、町道朝来幹線が走りその町道を挟み1989年本調査となった久末京徳遺跡がある。この遺跡から奈良・平安時代の建物跡・溝や豊富な土師器類が出土した。

このため、調査対象となった建設予定地に計6本のトレンチを入れたが遺構、遺物を検出することはできなかった。



久末京徳遺跡位置図

71. のよし延吉遺跡

所在地 東国東郡安岐町大字下山口字延吉
調査原因 公共施設建設
調査期間 910709
調査主体 安岐町教育委員会

調査面積 15,000㎡
担当者 松本 啓子
処置 工事着工(一部埋土)

遺跡は糸原杵築線と町道西本線とが交わる西側に位置する。この区域は一面水田と畑が広がり、遺跡の南側には安岐川の支流の一つである荒木川が流れる。

試掘調査の結果、遺物としては平安時代のものと思われる土器片が1点のみであった。

また遺構においては、若干の柱穴跡を検出したためトレンチを拡張したが他は検出できなかった。よって、柱穴の検出近辺は建物部分に当たらないことから、埋土とすることとし、工事を行なった。



延吉遺跡位置図

72. 小^こ熊^ま山^こ古^こ墳

所在地 杵築市大字狩宿字小熊
調査原因 リゾート開発の事前確認調査
調査期間 911204～920324
調査主体 杵築市教育委員会

調査面積 約65㎡
担当者 平川 信哉
処置 現況保存

位置 別府湾の喉元美濃崎漁港の北東側の小熊山山頂部に立地し、南側約600mのところに御塔山古墳が所在する。



遺構 古墳時代の前方後円墳1基
 前方部西側が欠損しているものの全体の保存状態は良好である。境丘測量調査と墳端確認のためのトレンチ調査を行った。

遺物 壺型埴輪等が出土。

まとめ 4世紀中～後半では九州で最大級。

小熊山古墳位置図

文献：清水宗昭・平川信哉・後藤方彦『杵築地区遺跡群発掘調査概報』Ⅲ 1992 P 8～13。



小熊山古墳全景

73. 御塔山古墳

所在地 杵築市大字特宿字御塔
調査原因 リゾート開発の事前確認調査
調査期間 911202～920330
調査主体 杵築市教育委員会

調査面積 約40㎡
担当者 平川 信哉
処置 現況保存

- 位置** 別府湾の喉元美濃崎漁港の東側の標高20mの丘陵に立地し、北側約600mのところに小熊山古墳が存在する。全長80mの円墳。
- 遺構** 古墳時代の造り出し付き円墳1。北側周溝部分などが欠損しているものの全体の保存状態は良好である。墳裾および周濠の確認と、墳丘測量を行った。
- 遺物** 円筒埴輪片等が出土。
- まとめ** 5世紀中頃では、九州最大級。



御塔山古墳位置図

文献：清水宗昭・平川信哉・後藤方彦『杵築地区遺跡群発掘調査概報』Ⅲ 1992 P 3～7。

74. 藤川地区

所在地 杵築市大字大内字中尾
調査原因 農業基盤整備事業
調査期間 910725～910911
調査主体 杵築市教育委員会

調査面積 約380㎡
担当者 平川 信哉
処置 事業実施

- 位置** 江頭川石岸段丘部分。
- 遺構** なし。
- 遺物** 土器片数点。
- まとめ** 特になし。



藤川地区位置図

文献：平川信哉『藤川地区』『杵築地区遺跡群発掘調査概報』Ⅲ 1992。

75. 日出東部地区

所在地 速見郡日出町大字大神秋貞軒の井
調査原因 県営日出東部地区圃場整備事業
調査期間 910717～910724
調査主体 大分県教育委員会

調査地は台地と台地間の谷の水田である。水田は深田であり、収穫のあとでも水が張っている。調査地の南側には糸ヶ浜海岸があり、この海岸と調査地の間の圃場整備事業の時に五輪塔などが出土している。

調査区はグリッドを22ヵ所設定した。出土遺物はなく、泥土中より自然堆積による木等が検出された。

文献：高松永治「日出東部地区」『大分県内遺跡詳細分布調査概報』11 1992 P13。

調査面積 約100㎡
担当者 高松 永治
処置 計画通り工事



日出東部地区位置図

76. 鹿跡遺跡

所在地 速見郡日出町大字藤原字大津
調査原因 日出町農村地域構造改善事業
調査期間 910701～910709
調査主体 大分県教育委員会

空港高速道路建設で余った土砂が既に2～10m廃棄されており、全体的な調査は不可能なため、切り土となる地点に2×2mのグリッドを6ヵ所設定した。調査の結果、出土遺物等はないが、搬入された土砂が空港高速道路の会下遺跡付近のものであるためか土砂には黒曜石、土器片等が含まれていた。

文献：高松永治「鹿跡遺跡」『大分県内遺跡詳細分布調査概報』11 1992 P13。

調査面積 約30㎡
担当者 高松 英治
処置 盛土後圃場整備



鹿跡遺跡位置図

77. ^{あまづつみ}天堤遺跡(C地区・D地区)

所在地 速見郡日出町大字藤原宇百合野
調査原因 セントラルフィールド日出スポーツ
調査期間 910220～910831
調査主体 日出町教育委員会

調査面積 1,600㎡
担当者 高松 永治
処置 未着工

鹿鳴越連山の東側にあたり、周知遺跡として天堤遺跡がある。遺跡は天堤池(淵れ池)の付近にあり表採でナイフ形石器や三稜尖頭器などがある。今回は前に表採された地点より東側に300mくらい下がったC地区と西側500mくらい上がったD地区の2ヵ所に調査区を設定した。C地区では縄文時代の集石遺構や遺物のほか、旧石器時代の細石核、三稜尖頭器、石核など出土している。D地区では遺構・遺物など確認できなかった。C地区の標高は約250m、D地区の標高は約350mである。



天堤遺跡位置図

78. ^{とうよう}東洋サッシ工場

所在地 速見郡日出町大字川崎字小深江
調査原因 サッシ組立工場建設
調査期間 910127～910201
調査主体 日出町教育委員会

調査面積 約150㎡
担当者 高松 永治
処置 工事実施

調査地は谷を隔てて南側に早水台遺跡があるため、遺物・遺構の検出の可能性が高いと考えていたが、港湾整備の廃土が一部に3～4m程盛りられたり、ローム層まで削平されており、遺物・遺構は検出されなかった。



東洋サッシ工場位置図

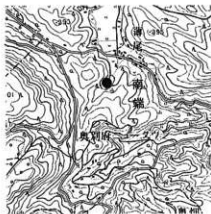
79. ^{おがた}尾形第1遺跡

所在地 速見郡日出町大字南端字尾形
調査原因 道路建設
調査期間 911004～911011
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 60㎡
担当者 高橋 信武
処置 現状のまま

北大道路の日出ジャンクション予定地内にある。遺跡は標高 360m 前後の谷地形の部分で、南西から北東に向かって開けている。中央部に枯れ沢があり、兩岸を試掘した結果、西側の斜面部において縄文時代早期の遺物包含層を検出した。押型文土器や焼けた石が出土した。包含層は地表面から 30～40cm の面から始まり、厚さは 30cm ほどである。

周辺の大部分は未買収地であり、買収後に調査を開始する予定である。



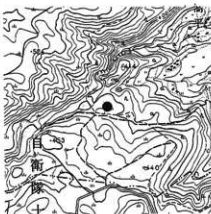
尾形第1遺跡位置図

80. エゴノクチ遺跡

所在地 遠見郡日出町大字南畑字エゴノクチ
調査原因 道路建設
調査期間 901015～911112
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 20,000㎡
担当者 高橋信武・山本健太郎・須原緑
処置 調査後破壊

位置 別府湾の西側に広がる丘陵上にあり、標高は約410m前後。西南部がもっとも高く北東方向に扇形に広がる小丘陵上にある。北側は川が流れ、その北は比高差100mほどの山に遮られている。遺跡からは国東半島をはじめ別府湾、佐賀関半島や遠くは四国の山並みも見渡せる眺望の良さである。現状は山林および自衛隊の演習地で、厚く堆積した火山灰層が遺物の包含層となっている。



エゴノクチ遺跡位置図

遺構 旧石器時代：集石1
縄文時代：集石30・集積遺構1・陥し穴10
弥生時代：陥し穴1
平安時代：掘立柱建物跡2
集石遺構は早期の押型土器に伴う。陥し穴はすべてアカホヤ火山灰より上から掘り込まれており、九州の例を早期だけに限定して考えるのは誤りであることを示す。



調査風景

遺物 旧石器は黒色帯からも出土。縄文時代は草創期から後期にわたる遺物が出土している。珍しくも草創期の腰岳産とみられる黒曜石製の舟底形細石核があるが、共伴する土器は未確認である。押型文・平栞式・塞の神式・鎌石橋式・轟式・羽島下層式・曾畑式・船元式・中津式・鐘崎式等がある。

まとめ 山間部の比較的標高の高いところにある遺跡であるが、遺構・遺物の量からみて当時の拠点的な集落であった可能性が高い。

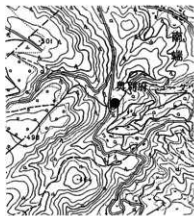
81. 尾形第2地区

所在地 速見郡日出町大字南端字尾形
調査原因 道路建設
調査期間 910801～910808
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 200㎡
担当者 綿貫 俊一
処置 現状のまま

北大道路の日出ジャンクション予定地内にある。尾形第1遺跡と同様に部分的な買収に留まっているため、道路予定地の一部を試掘した。

予定地の地形は標高400m前後の緩やかな北向きの斜面である。調査は重機によって表土剥ぎを行ったあと、遺構・遺物の確認作業をし、以下下層まで順次同様の手順を繰り返したが、何ら遺構・遺物は出土しなかった。



尾形第2地区位置図

82. 扇山遺跡

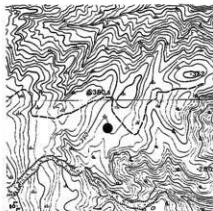
所在地 別府市大字内蔵字扇山
調査原因 公園造成
調査期間 911004～911015
調査主体 別府市教育委員会

調査面積 10,000㎡
担当者 高橋 徹・永野康洋
処置 計画通り工事

遺跡は別府市の西北部、通称十文字原と呼ばれる高原状の火山灰台地の一角にある。以前より石器や石鉄が表面採集されるため今回の調査となった。

調査は22カ所のトレンチを設定し遺構・遺物の確認を行った。

その結果、遺構・遺物は検出されなかった。



扇山遺跡位置図

83. ^{ほむろ}羽室遺跡

所在地 別府市大字羽室字東平
調査原因 宅地造成
調査期間 911210
調査主体 別府市教育委員会

調査面積 500㎡
担当者 水野 康洋
処置 計画通り工事

遺跡は、石垣原扇状地の北側、鉄輪から亀川に至る丘陵の頂上部の盆地になった通称羽室地区と呼ばれる所にある。以前より縄文式土器等が採集されることが知られており、昭和57年には羽室台高校建設の際県教委が調査を行っている。

今回の調査地は、羽室台高校に隣接した位置にあるため行ったものであり、5ヵ所のトレンチを設定し、遺跡の確認を行った結果、以前この土地を所有していた業者の造成工事により破壊され、遺跡の価値を失っていることが判明した。



羽室遺跡位置図

84. ^{きつしょうじ}吉祥寺跡

所在地 別府市大字別府字乙原3563
調査原因 公園整備
調査期間 910326-910330
調査主体 別府市教育委員会

調査面積 64㎡
担当者 水野 康洋
処置 計画通り工事

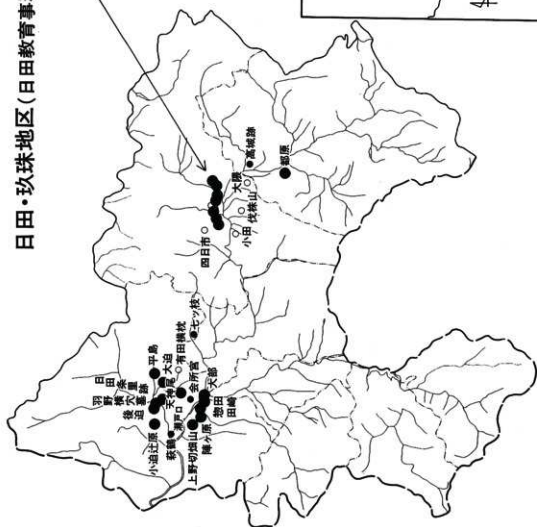
寺跡は南朝見川、西に立石川、北に石垣原台地を望む乙原台地にある。吉祥寺は大友氏8代氏時が創建し大友氏の菩提寺として栄えたが、1586年に島津軍に焼かれ廃寺となる。現在は遊戯施設だが、堂宇(再建)・氏時の墓・宝篋印塔等が当時の面影を残す。ここには大友8代持直の財宝埋蔵伝説があり、今回の調査となった。遊戯施設の中央付近に高さ7.8m、径15m～20mの墳丘状の塚がありこの頂上部に2ヵ所のトレンチを設定し調査を行った結果、遺構・遺物は検出されなかった。



吉祥寺跡位置図

日田・玖珠地区(日田教育事務所管内)

瀬戸
瀬戸古墳群
治別当
上の原横穴墓
池の原横穴墓
下徳理理
下徳理理 A、B
鷹森横穴墓
白岩
谷ノ瀬



85. 小迫辻原遺跡

所在地 日田市大字小迫字辻原
調査原因 天地返し
調査期間 910826～920330
調査主体 日田市教育委員会

調査面積 7,984㎡
担当者 土居和幸・森山敬一郎
処置 現状保存

位置 遺跡は日田盆地北部の台地群の一角である標高約124mの辻原台地上にある。この台地の南側には朝日川が蛇行しながら東流しており、比高差は約40mを測る。遺跡では昭和30年代に圃場整備事業が行われ平坦な地形となっているが、従来は緩やかな起伏の地形であった。平成2年には九州横断自動車道が開通し台地は二分され、様相は様変わりしている。しかし、この道路建設に伴う発掘調査が起因となり、調査面積もこれまで8年間で約52,000㎡にまで達している。



遺構 (H-2区) 弥生時代：土坑7、円形周溝遺構1、小児用甕棺墓2

古墳時代：竪穴式住居跡11、掘立柱建物1(?)

中世：掘立柱建物2

近世：溝1

(O-2区) 弥生時代：土坑1

古墳時代：環濠居館1、竪穴式住居跡4、掘立柱建物2(?)

中世：掘立柱建物12、柵列3、溝1、方形溝1

近世：溝8(?)

遺物 弥生時代：確認された遺構のほとんどが中期後半～後期初め

(須玖式土器などの弥生土器)

古墳時代：竪穴式住居跡、環濠居館は庄内式～布留式並行期

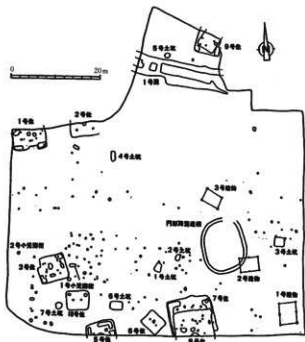
(古式土師器のほか、竪穴式住居跡から鉄鍬、刀子などの鉄器、石皿などが出土)

中世：龍泉窯青磁、白磁、土師器など

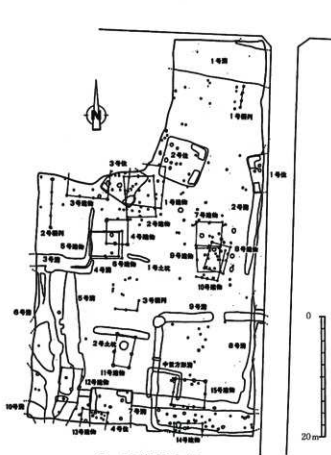
まとめ 今回の調査では、古墳時代前期の竪穴式住居跡2基にベット状遺構のコーナー部分を外に張り出させる特異プランの住居跡を確認した。また、一辺が約20m四方の内部に掘立柱建物1棟を有する環濠居館跡を確認し、これまで発見されている2基の環濠居館や3基の環濠との関連が目される。円形周溝遺構は日田市内では初例である。



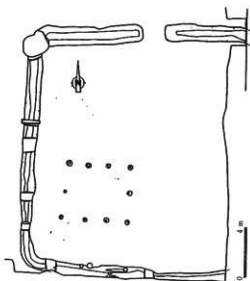
発掘調査位置図



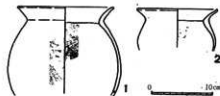
H-2区遺構配置図



O-2区遺構配置図



3号環濠居館跡平面図



3号環濠居館跡出土遺物

86. 荻鶴遺跡 おぎつる

所在地	日田市大字友田字荻鶴	調査面積	32,000㎡
調査原因	レジャー施設建設	担当者	行時 志郎
調査期間	911213～911220	処置	平成4年度本調査予定
調査主体	日田市教育委員会		

日田盆地西部、花月川右岸の河岸段丘上に存在する。遺跡周辺は現在水田がおもであるが、国道386号線沿いであるため、近年宅地化が目立ってきている。ここから花月川を挟んで西側堤防沿いには、古墳時代後期の三郎丸古墳が存在している。

試掘調査の結果、開発予定地東部で中世の掘立柱建物跡群が発見されたほか、南西部で、溝・柱穴や中世の水田層と考えられる包含層が確認された。



荻鶴遺跡位置図

87. 日田条里遺跡群 ひたじょうり

所在地	日田市大字三和字五反田他	調査面積	10,000㎡
調査原因	道路建設	担当者	友岡 信彦
調査期間	910901～910930	処置	調査後破壊
調査主体	大分県教育委員会		

遺跡は日田盆地の北部、花月川と有田川の合流する沖積地に位置する。

調査は平成2年度からの継続であり、今回は天神地区の約10,000㎡の試掘調査を行った。

調査の結果、古墳時代の住居跡1軒と柱穴群をごく限られた地域で確認した。他の地域は地表から0.5～1mで礫層が現れ、花月川の氾濫源であった。本調査は平成4年度に予定している。条里遺構は今回確認できなかった。



日田条里遺跡位置図

88. 後迫遺跡

所在地	日田市大字波里字後迫	調査面積	15,000㎡
調査原因	道路建設	担当者	友岡信彦・橋本一彦
調査期間	910601～920330	処置	調査継続中
調査主体	大分県教育委員会		

位置 日田盆地の北部、通称山田原台地上の東端部にあり、標高は約125mである。遺跡の東側と北側は急峻な斜面となっており、盆地との比高差は約30mを測る。同台地上には小迫辻原遺跡の様な弥生時代から古墳時代にかけての大集落がみられる。現状は畑になっており削平の著しい部分もあるが、遺存状態は比較的良好である。

遺構 弥生時代：竪穴式住居跡25軒・土坑1基
小児用甕棺墓5基

奈良時代：土坑1基

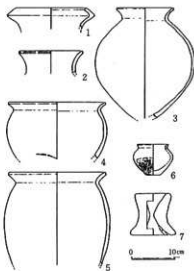
弥生時代中期から後期にかけての遺構がほとんどである。その他未発掘ではあるが、調査区の東側部分で石棺が検出されており、周辺に棺材が散在していることから墓地になる可能性がある。

遺物 弥生時代から奈良時代にかけての遺物が出土している。土器類の他に石庖丁が20点程出土した。

まとめ 道路幅という限られた範囲の調査のため全体を把握することは出来ないが、その地形から周辺に遺跡が広がっていると思われる比較的大規模な集落であったと考えられる。



後迫遺跡周辺地形図



後迫遺跡出土遺物

文献：橋本一彦「後迫遺跡」『九州横断自動車道埋文調査概報一日田～玖珠間』2 1992 P 4～13。

89. ^{ほのよこあなくん}羽野横穴群

所在地	日田市天神町	調査面積	600㎡
調査原因	急傾斜地対策事業	担当者	高橋 徹
調査期間	920303～920326	処置	調査後破壊
調査主体	大分県教育委員会		

- 位置** 花月川左岸、日田盆地を見下ろす台地の南側崖面中腹。
- 遺構** 横穴墓2基。12号横穴墓は玄室および羨道部の一部が残存。玄室床面に人頭大の敷石有り。13号横穴は玄室床面が残っているだけで、天井他は消滅。床面から耳環、小玉等出土。
- 遺物** 13号横穴から、耳環4個、ガラス丸玉多数、人骨片が出土。
- まとめ** 羽野横穴は1985年に、上記の事業による発掘調査がなされ11基の横穴が調査されている。今回さらに2基をくわえたわけで、北側に他の横穴が存在している。



羽野横穴群位置図

90. ^{ありたよこまくら}有田横枕遺跡

所在地	日田市大字有田字横枕	調査面積	800㎡
調査原因	道路建設	担当者	橋本 一彦
調査期間	9109～9110	処置	調査後破壊
調査主体	大分県教育委員会		

遺跡は日田盆地をとり囲む低丘陵の北東部、標高190mから210mに位置する。同丘陵上の北側に有田塚ヶ原古墳群が、また谷を挟んで南側には旧石器の散布地である松野原遺跡がある。当地区外の北側で住居跡と貯蔵穴が事前に認められており、更にその地形等から当初集落跡の可能性も考えられた。

調査は、まず重機を用いて調査区全面の表土剥ぎから行った。その結果ほぼ全面にわたって岩盤層が広がっており、調査区東端の北側部分から溝状遺構が一条検出されただけであった。溝状遺構の東側は調査区外に延びており、西側は削平をされているため、その全容は明らかではない。その規模は幅約1.5m、残存する深さは約0.15～0.3mである。なお時期については遺物が検出されなかったため不明である。



有田横枕遺跡位置図

文献：橋本一彦「有田横枕遺跡」『九州横断自動車道関係係理文調査概報一日田～玖珠間一』2 1992 P.25.

91. 天神尾遺跡

所在地 日田市大字元宮字天神尾
調査原因 道路建設
調査期間 920801～920903
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 約400㎡
担当者 栗田 勝弘
処置 調査後破壊

位置 元宮遺跡を望む、通称、天神尾と言われる小丘陵に位置する。

遺構 無し。

遺物 糸切り底の土師器が破片で多数出土している。何らかの祭祀に関係するものであろう。



天神尾遺跡位置図

92. セツ枝遺跡

所在地 日田市大字東有田字セツ枝
調査原因 道路建設
調査期間 910806～910924
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 6,000㎡
担当者 友岡 信彦
処置 調査後工事

遺跡は日田市東部の山間部、天瀬町に隣接する山岳の標高 255m 前後の舌状丘陵先端部に位置する。この丘陵は南北80m、東西 400m 前の平地地で西～北側にかけては、急傾斜地である。

調査区は3枚の段々畑であり、それぞれ30cmほどの段差を持つ。遺構検出作業の結果、南西の一番高い畑ではほぼ全面から柱穴群を確認した。柱穴は直径30cm前後で深さ5～10cmと浅く残りは非常に悪い。

遺物は近世の陶磁器片2点が出土した。



文献：友岡信彦「セツ枝遺跡」『九州横断自動車道関係歴史文調査概報-日田～玖珠間-』2 1992 P.26.

93. 慈眼山瀬戸口遺跡

所在地 日田市城町2丁目字瀬戸口
調査原因 住宅建設
調査期間 910801～920131
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 1,000㎡
担当者 坂本嘉弘・後藤方彦
処置 調査後破壊

位置 日田盆地の東北隅に位置し、北側に中世の山城がある慈眼山があり、東側は慈眼山から続く丘陵が壁のように立っている。また、遺跡の南の丘陵上には丸山古墳がある。標高は80mで西に緩く傾斜し、遺跡からは日田盆地の広がりが見渡せる。

遺構 奈良時代：井戸1、水汲み場1

中世：井戸3、土坑7、溝4、石垣1

遺物 調査中出土した遺物は縄文時代後晩期・弥生時代中後期・古墳時代後期なども含まれるが、主体となるのは奈良時代と鎌倉・室町時代のものである。

奈良時代の遺物は横板組の井戸の中や、その周辺から出土したもので、「門」や「林」と墨書した須恵器皿や底に穴を開けた須恵器杯や長頸瓶、木製の皿や曲物、齋桶などがある。

鎌倉・室町時代の遺物は、多量の土師質土器の皿や碗をはじめ、青磁・白磁などの輸入陶磁器、摺り鉢や火鉢、滑石製の石鍋が出土したほか渡来銭・硯・石臼なども見られる。中でも、高さ4cmの青銅製十一面観音像は出土品として注目される。

まとめ 慈眼山瀬戸口遺跡の調査は、昨年の教職員住宅建設に伴うものと国家公務員住宅に伴うものに引続いて実施したものである。検出した遺構から町屋の構造が徐々に明らかになりつつある。



慈眼山瀬戸口遺跡位置図

文献：坂本嘉弘「慈眼山瀬戸口遺跡—平成3年度
国家公務員H日住宅埋文調査概報—」
1992。

94. 大迫遺跡

所在地 日田市大字有田字大迫
 調査原因 道路建設
 調査期間 910408-910802
 調査主体 大分県教育委員会

調査面積 900㎡
 担当者 友岡信彦・橋本一彦
 処置 調査後破壊

位置 大迫遺跡は日田盆地を取り囲む低丘陵北東部に位置する。標高は145m前後である。峰続きの北側平地には2基の中尾古墳群が、さらに周辺の低丘陵や丘陵裾にも多数の古墳が存在する地域である。また低地には尾瀬遺跡や平島遺跡等の古墳時代の住居跡集落がある。

遺構 古墳時代：土壌墓8

石蓋土壌墓15

石棺1

遺構の周囲には棺材が散在していることから土壌墓の敷基は石蓋土壌墓の可能性はある。

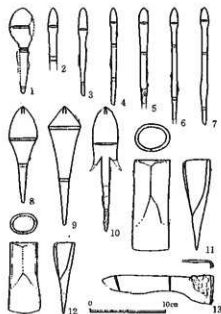
3基の石蓋土壌墓は0.5×0.3m程の小児用であり、0.8m前後の凝灰岩を石蓋として使用している。

石棺は北側小口部分が残存しているだけで石蓋・側石はなく残りは悪い。

遺物 土壌墓・石蓋土壌墓内からは鉄鏃・管玉・小玉・土師器等が出土した。

石棺内からは鉄刺2・鉄鏃8・鉄斧2・鉄鎌1の多数の鉄器が出土した。

まとめ 石棺は多数の副葬品を持ち、丘陵の中央部分に単独で存在することから古墳の可能性が考えられたが周溝の確認はできなかった。時期は4世紀後半から5世紀前半と考えられる。



3-21-23号墓出土鉄器実測図

文献：友岡信彦「大迫遺跡」『九州横断自動車道関係埋文調査概報一日田-玖珠間』2 1992 P14-24。

95. ^{ひらしま}平島遺跡

所在地 日田市大字平島
調査原因 県道白地日田線建設
調査期間 910522～910531
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 1,500㎡
担当者 村上 久和
処置 調査後破壊

位置 遺跡は日田盆地の北東部に位置する有田川の南岸の河岸段丘上標高 110m に位置する。

遺構 現水田面の中の建設予定幅を調査した。その結果、調査区西側で南北に直線的に延びる溝を確認した。溝は2度の重複関係が認められた。また、溝のレベルから水は南から北へ流れていたと考えられる。

遺物 出土遺物は弥生前期末～中期初頭の壺、甕片10点程と扁平打製石斧2点である。

まとめ 調査区が狭いため遺構の性格については不明な部分が多いが、弥生時代前期末～中期初頭の時期および溝周辺に竪穴等の集落跡が認められないことなどから水田等に関わる溝と推定される。



平島遺跡位置図

96. 上野切畑山遺跡

所在地	日田市上野町字切畑山	調査面積	512㎡
調査原因	道路建設	担当者	行時 志郎
調査期間	910626～910712	処置	調査後破壊
調査主体	日田市教育委員会		

位置 日田盆地南部の上野原台地上に存在する。台地と沖積地との比高差は約30mである。調査地は台地のほぼ中央部にあたる。ここから沖積地に向かって深く浸食された谷筋が存在するが、調査は谷の左側端を南北に走る道路改良工事予定地に従って行った。この調査地点より南側約300mの位置に奈良時代の遺構が多数発見された上野第1遺跡が存在している。また、台地北端一帯では弥生時代の竪棺や石棺などがこれまでに発見されている。



上野切畑山遺跡位置図

- 遺構** 奈良時代から中世までの間と考えられる溝のほか柱穴数個が確認された。
- 遺物** 奈良時代と考えられる須恵器と鉄銚基部、中世の糸切り痕の見られる土師器片が出た。
- まとめ** 奈良時代の遺物は上野第1遺跡が発見された建物群の時期であり、この調査により当該時期の遺跡の広がりが確認された。

97. 陣ヶ原遺跡

所在地 日田市高瀬字陣ヶ原
調査原因 道路建設
調査期間 910716～910831
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 約500㎡
担当者 栗田 勝弘
処置 調査後破壊

位置 日田市の西方、標高140mの丘陵上に位置する。付近には、福岡県岩戸山古墳出土の石人が安置されている天神社がある。また、小支谷の向こうには、「豊後国風土記」の記述にみる「鏡坂」があり、眺望は良い。

遺構 古墳時代：竪穴1基（住居跡）

遺物 上記の竪穴より、小形丸底壺片等が出土している。

まとめ 道路の通過地点が台地の縁辺部であったため遺跡の破壊は最小限で済む。集落の中心部は台地の中央であると推測できる。



陣ヶ原遺跡位置図

98. 大部遺跡

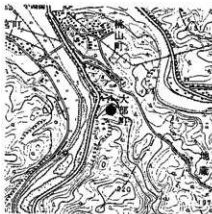
所在地 日田市大字高瀬字手崎
調査原因 道路建設
調査期間 920222～920330
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 約2,000㎡
担当者 田中裕介・後藤幹彦
処置 調査後破壊

位置 大部遺跡は大山川を挟んで手崎遺跡の対岸の台地上に位置する。千人塚古墳の位置する台地中央部から派生する尾根の鞍部に遺跡は位置する。

遺構 縄文時代早期押型文期の包含層が検出され、それに伴って集石遺構3箇所炉穴3箇所が見つかった。

7世紀代と考えられる灰土壙5基を検出した。炭焼き窯あるいは火葬墓とも推定される遺構であるが調査のなかから用途を推定することはできなかった。



大部遺跡位置図

文献：田中裕介「手崎遺跡・大部遺跡―一般国道210号日田バイパス埋文調査概報田」1992 P15。

99. 手崎遺跡

所在地	日田市大字高瀬字手崎	調査面積	約4,000㎡
調査原因	道路建設	担当者	田中裕介・後藤晃一・富田修司
調査期間	910507～920221	処置	調査後破壊
調査主体	大分県教育委員会		

位置 日田市南部の三隈川の支流、大山川の西岸に広がる河岸段丘上の最奥部に立地する。遺跡の背後に湧水があり、集落の立地条件としては適している。

遺構 縄文時代後期竪穴住居跡1基
古墳時代竪穴住居跡4基
奈良時代竪穴住居跡9基
土壌多数
中世墓2基
掘立柱建物2棟

各時期の集落が重複している。なかでも縄文時代後期西平式の円形竪穴跡は、日田地方初例である。古墳時代前期の竪穴の特徴は方形2本柱という点にある。奈良時代の集落は竪穴住居を中心に構成される集落である点にある。中世墓2基の周辺には鎌倉時代の柱穴が群集しており、屋敷墓と考えられる。

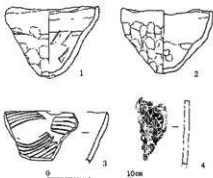
遺物 縄文時代の遺物は早期押型文土器とそれにとまなう石器類、前期の麻式土器、後期竪穴からは西平式の良好な一括資料が出土した。晩期前半の土器も多い。

奈良時代の住居跡や土壌からは特筆すべきこととして小型の焼塩用製塩土器が20個体ほど出土している。この形式としては県内初例である。

中世墓からは副葬品として鑄蓮弁内面花文の青磁碗が完形で検出した。口縁内面を1箇所人為的に打ち欠いている。



手崎遺跡位置図



住居10内土壌(土壌30)出土製塩土器(1/5)

文献：田中裕介「手崎遺跡・大部遺跡——般
国道210号日田バイパス埋文調査概報
Ⅲ——」1992 P.4～14。

100. 会所宮遺跡

所在地 日田市大字田島字其田
調査原因 下水道工事
調査期間 911220～920124
調査主体 日田市教育委員会

調査面積 500㎡
担当者 土居和幸・森山敬一郎
処置 調査後破壊

遺跡は、日田盆地東部の通称元宮原台地(遺跡)から西側にのびる標高約150mの会所宮山丘陵の先端北部裾部に位置する。この会所宮山丘陵は盆地を取り巻く周辺台地等にあつてはちょうど沖積地に飛び出すようであり、山上からの眺めは盆地を望むには好適地にあたる。

調査では時期不明の土坑3・柱穴数個と弥生土器・須恵器・土師器が出土したが、平成4年度の調査では中世の水田遺構を確認している。



会所宮遺跡位置図

101. 惣田遺跡

所在地 日田市琴平町字惣田
調査原因 市道平原一捨ノ平線改良工事
調査期間 910730～910910
調査主体 日田市教育委員会

調査面積 1,200㎡
担当者 行時 志郎
処置 調査後破壊

位置 日田市南部にあり、遺跡の西部は高瀬川、北部は三隈川といった大河川と津江山系に連なる山地部の間にわずかに広がる平坦部に立地している。遺跡周辺ではほとんど水稲耕作を行っているが、一部畑作の所もある。今回調査を行った位置よりわずか50mの地点には、6世紀後半頃の横穴式石室を内部にもつ惣田塚古墳が存在している。

遺構 中世の柱穴や弥生時代の包含層などが確認された。

遺物 弥生時代中期の丹塗り土器や中世の土師質土器などが出土したが、古墳時代の遺物の出土はなかった。

まとめ 今後、今回調査した地区の東側を調査し各遺構の広がりや時期を検討したい。



惣田遺跡位置図

102. 谷ノ瀬遺跡

所在地 玖珠郡玖珠町大字戸畑字谷ノ瀬
調査原因 道路建設
調査期間 911108～911126
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 5,400㎡
担当者 村上・染谷・永松・須原
処置 調査後破壊

位置 遺跡は玖珠盆地西部の通称野田山丘陵の北側斜面の谷部に位置し、標高は540m前後を測る位置にある。

遺構 谷をはさんで東西にのびる丘陵斜面部の調査を行った結果、弥生時代中期中葉のピットおよび包含層と北側斜面上部で8世紀中頃～後半の炭窯を、同下部東側端で6世紀後半の竪穴住居2棟と1×1間の掘立柱建物1棟などを検出した。竪穴住居はともに北辺にカマドをもっている。

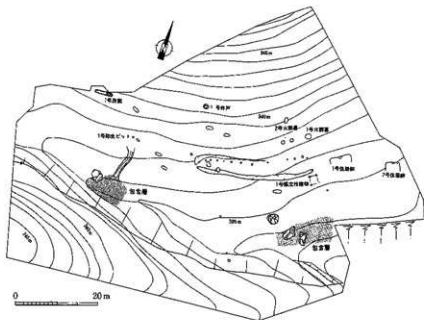
遺物 弥生時代のものとしては須玖Ⅰ式に属する甕、6世紀後半の竪穴からは須恵器環、土師器甕等が、炭窯の周辺からは8世紀中頃～後半頃の須恵器碗が出土した。

まとめ 遺構中最も注目されるものは6世紀後半の竪穴2棟と掘立柱建物1棟からなるこの時期の単位集団の最小規模のものと考えられる遺構群である。

文献：村上久和「谷ノ瀬遺跡」『九州横断自動車道開係州文調査概報-日田～玖珠間-』2 1992 P28～29。



谷ノ瀬遺跡位置図



谷ノ瀬遺跡遺構配置図

103. 白岩遺跡

所在地 玖珠郡玖珠町大字四日市宇白岩
調査原因 九州横断自動車道建設
調査期間 910901～911211
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 3,000㎡
担当者 村上・染矢・永松・須原
処置 調査後破壊

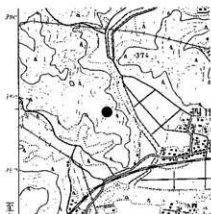
位置 遺跡は玖珠盆地西部の玖珠川左岸、標高390mの山頂にある。

遺構 調査は山頂平坦部を中心に行なった。その結果、山頂屋根根部で全長56m、深さ1～2m、幅1.5～3mの断面逆台形の環濠を検出した。環濠底部はピットが検出された。

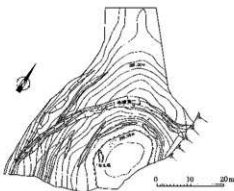
環濠内の屋根頂部は、長径20m、短径12mの範囲を平坦にカットし、斜面部との境にも浅い溝を巡らす。この溝は北側で切れており、その下方に柱穴を検出したところから入口部分と考えられる。頂部西側で土坑と焼土坑を各1基検出した。

遺物 出土遺物は環濠内よりほぼ完形の壺、底部片、磨製石鏃、河原石転用の石投弾 200点以上が、1号土坑より壺口縁片が出土した。時期は弥生時代後期前半のものである。

まとめ 遺跡の立地から都出氏の弥生時代高地性集落カテゴリーAタイプに属し、九州島内における高地性集落としては福岡県杷木町西ノ迫遺跡について2例目のものである。



白岩遺跡位置図



白岩遺跡遺構配置図



白岩遺跡1号環濠土層図

文献：村上久和「白岩遺跡」『九州横断自動車道関係学芸文化財調査概報－口田～玖珠間－』2 1992 P.30～33。

104. 鷹巣横穴群

所在地 玖珠郡玖珠町大字帆足宇鷹巣
 調査原因 私道建設
 調査期間 910618～911115
 調査主体 玖珠町教育委員会

調査面積 1,500㎡
 担当者 横山 啓二
 処置 調査後保存

位置 鷹巣横穴群は、玖珠町大字帆足に所在する横穴墓で森川右岸に位置する台地南側崖面に開口する。玖珠町は九州最大の河川である筑後川上流域の玖珠川によって形成された玖珠盆地を中心としており、遺跡の分布もそれに呼応している。また、玖珠川の支流によって形成された扇状地に集落が存在し、それらを望む台地上に石棺群や古墳等の墳墓が点在している。



鷹巣横穴群位置図

遺構 古墳時代：横穴墓12基・テラス状遺構3

横穴墓は12基からなり、4号墓は奥壁に裝飾(円文・人物?)を持つものである。横穴の形態は平面正方形の断面ドーム型を呈しており、裝飾などの条件から肥後地域との関連が考えられよう。

遺物 遺物は土器、鉄器、玉類等多数出土しており、鉄器類では鉄鏃、刀子、馬具を確認している。鉄鏃の形態は主に圭頭、長頸、方頭に分類できる。それらの鉄鏃は、3・6・7・8・12号墓から集中して出土したものである。馬具は3号墓から飾金具(鉄製)、4号墓から轡(素環鏡板付轡)、辻金具(巻貝製)、鞍、鉸具、留金具、鍔金具が確認された。特に4号墓から出土した馬具はセット関係が注目される場所である。また、玉類では管玉(碧玉製)、勾玉(瑪瑙・水晶製)、切子玉(水晶製)、土製玉、小玉(ガラス製)等を確認している。さらに裝飾品である銅(銀製)耳環等も出土した。土器類では土師器、須恵器ともに高杯、坏蓋などが見られるが、須恵器では提瓶、長頸壺も確認された。これらの遺物は伝世したものも若干考えられるが、年代はほぼ6世紀後半に比定できる。

まとめ 遺跡が立地する台地上には名草台遺跡、千人塚古墳等が確認されており、台地全体が墓域として改めて認識できるところである。

105. ^{しもあやがき}下綾垣遺跡

所在地 玖珠郡玖珠町大字綾垣字下綾垣
調査原因 道路建設
調査期間 910423～911108
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 4,000㎡
担当者 染谷和徳・永松みゆき
須原 緑
処 置 調査後破壊

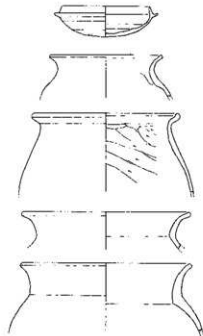
位 置 下綾垣遺跡は玖珠盆地西北部に所在、太田川東岸の丘陵がつくりだす谷部平地地標高約 345mに位置する。遺跡の位置する平地は南北約 100m、東西約50m、北面を除く三方を大小丘陵に囲まれ北西に向って緩やかに太田川氾濫域へと落ち込んでゆく。太田川との比高差は30mほどである。

遺 構 古墳時代の竪穴住居跡18棟、掘立柱建物跡7棟、土墳墓2基、土坑3基、竪穴1基、柱穴 200穴余り、陥穴1基、溝状遺構1条、自然流路1条、奈良末から平安時代にかけての墳墓1基、縄文から中世にかけての包含層を確認した。竪穴住居跡は同位置に建て替えがなされているものや、自然流路と並ぶものなどがあり一定の集団によって意識的な占有がなされていたと考えられる。さらに12棟の住居跡からは南を除く三方にそれぞれカマド構造を確認した。カマドのなかには焚口部から煙道部までの形状を良く止めているものもあった。

遺 物 住居跡内の遺物が大半で、壺、甕、甌、坏、鉄鏃、靱金具等が出土している。遺物から6世紀後半を中心とした遺跡の展開を考えられる。包含層からは山形文を施した土器や石鏃、中世の上器片を確認した。



下綾垣遺跡位置図



下綾垣遺跡出土遺物実測図

文献：染谷和徳「下綾垣遺跡」『九州嶺南自動車道開保連文調査概報—口出～玖珠間—』2 1992 P35～44.

106. ^{しもやがき}下綾垣横穴墓群

所在地 玖珠郡玖珠町大字綾垣字下綾垣
調査原因 道路建設
調査期間 910422～910509
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 5,600㎡
担当者 染矢 和徳
処置 計画通り工事

遺跡は玖珠盆地北西部、太田川東岸の丘陵上及びその下方丘陵間急傾斜地にある。

調査は横穴墓及び他の遺跡の存在が考えられたため実施したもので、表土除去作業、続いて遺構検出をおこなった。急斜面は表土層（腐植土10cm～50cm）～茶褐色土（15cm大の礫を大量に含む基盤層）の順に堆積していた。丘陵上は表土層（腐植土30cm～50cm）～暗黄褐色粘質土（50cm大の岩を大量に含む基盤層）の順に堆積していた。

調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。



下綾垣横穴墓群位置図

文献：染矢和徳「下綾垣横穴墓群」『九州横断自動車道関係理文調査概報一日田～玖珠間～』2 1992 P 34.

107. ^{いのほる}池ノ原遺跡

所在地 玖珠郡玖珠町大字綾垣字池ノ原
調査原因 道路建設
調査期間 910422～910509
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 5,600㎡
担当者 染矢 和徳
処置 計画通り工事

遺跡は県道玖珠山国線沿い、太田川氾濫域より立ち上がる二つの丘陵上平担部標高340～350mの範囲に位置する。

西側平担部は表土除去作業の後、遺構検出を行った。堆積状況は表土層（腐植土20cm～30cm）～黒色土（20cm～50cm）～茶褐色粘質土の順に堆積していた。東側平担部は試掘坑17本を設定した。堆積状況は表土層（腐植土40cm～50cm）～明茶褐色土（70cm～90cm）～明茶褐色粘質土の順に堆積していた。

調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。



池ノ原遺跡位置図

文献：染矢和徳「池ノ原遺跡」『九州横断自動車道関係理文調査概報一日田～玖珠間～』2 1992 P 45.

108. 上の原横穴墓群

所在地 玖珠郡玖珠町大字帆足字上の原
調査原因 道路建設
調査期間 920302～920330
調査主体 大分県教育委員会

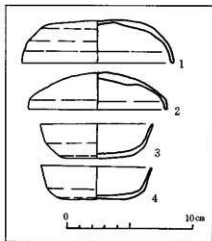
調査面積 960㎡
担当者 村上久和・須原 緑
処置 次年度調査継続

位置 名草台遺跡や千人塚遺跡がある上の原台地の南側斜面にあり、標高は約350～360mである。東側には、この斜面に並行する形で通称自衛隊道路と呼ばれる道路が走っていて、この道路沿いに装飾を施した玄室が確認されている鷹巣横穴墓群がある。また鷹巣横穴の南下に広がる河岸段丘上には、治別当遺跡がある。



上の原横穴墓群位置図

遺構 横穴墓 横穴は3段に分けて作られそれぞれにテラスがつく。3～4基の横穴が同じテラスを共有していて家族墓的な性格を持つ。テラスについては、2段目が約90%残っているが、1段目については大半が崩落ないしは削平によって消失しているが現状の約10%ほどしか残っていないのが現状である。テラスにおいて大甕を意図的に打ち割った状況や、杯や高杯などが数個体一括して出土する状況が見られた。玄室は平入りの長方形が多く、その大半が天井を家型に整形する。



上の原横穴出土須恵器
 (1列18号 2、3、4列15号)

遺物 墓前祭祀に関わる遺物が大半で、その中心は須恵器である。V期の宝珠つまみのつく杯や高台のついた杯が中心となって、それに高杯や提瓶、平瓶、はそう短頸壺、土師器などが混じる。また馬具や鉄鍬、といった鉄器類や耳環、ガラス小玉といった遺物も出土している。

109. 瀬戸古墳群

所在地 玖珠郡玖珠町大字帆足字瀬戸
 調査原因 九州横断自動車道建設
 調査期間 910805～920330
 調査主体 大分県教育委員会

調査面積 500㎡
 担当者 村上・染矢・永松・須原
 処置 調査後破壊

位置 遺跡は玖珠町南部の玖珠川の一支流である森川東岸、標高 375m の丘陵頂部にある。

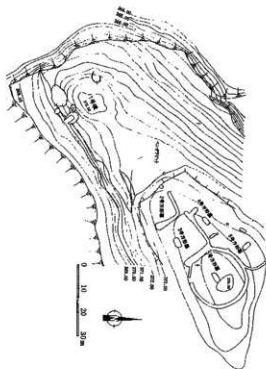
遺構 調査は、丘陵平担部全体に対して行った。その結果、丘陵先端部に竪穴石室を主体部にし石蓋土坑墓をもつ径16m前後の円墳と、周溝を共有した方墳4基、円墳1基を検出した。

遺物 円墳の中心主体である竪穴式石室は盗掘を受けていたため、出土遺物は鉄器（鉄鍔？）片のみであった。しかしながら周溝北側で直口壺2個体がほぼ完形で出土した。時期は5世紀初頭前後であろうか？

まとめ 本古墳群は出土遺物が少なくそれぞれの時期比定が困難であるが、内法3.4m前後の大型の竪穴式石室をもつ円墳と低塚系方墳で構成される墳墓群であり、在地型墳墓の構成を考える上で貴重な資料である。



瀬戸古墳群位置図



瀬戸古墳群遺構配置図

文献：村上久和「瀬戸古墳群」『九州横断自動車道関係植文調査概報一日出～玖珠間～』2 1992 P.49～53。

110. 瀬戸遺跡

所在地 玖珠郡玖珠町大字帆足字瀬戸
調査原因 道路建設
調査期間 910805～920330
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 2,200㎡
担当者 村上・染矢・永松・須原
処置 次年度調査継続

位置 遺跡は、玖珠町南部の玖珠川の支流である森川の東岸の丘陵上にある。遺跡の西南側の丘陵上には瀬戸古墳群があり、谷を挟んで南東側には帆足氏の居城帆足城と推定される丘陵が存在する。これらの丘陵は、玖珠盆地との標高差が約40mほどある。

遺構 調査区中央に浅い溝が走り、それに直交する溝が西側に検出された。この溝に囲まれた区域を中心に 100を越す柱穴が存在し、溝の内側に4棟、外側に1棟の掘立柱建物跡を確認している。その他、不定形の大型堅穴1基・馬歯骨の出土した土坑2基が、中世の遺構としては検出された。さらに、調査区西側に弥生時代の住居跡が3軒検出された。

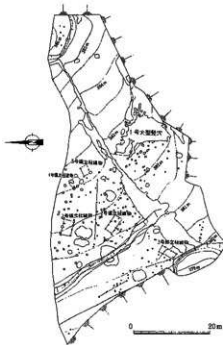
遺物 不定形大型堅穴を中心に、同安楽・龍泉窯系の青磁と白磁、土師器が出土した。また、弥生時代の堅穴からは、土師器片等が出土した。

まとめ 調査を進めて行くにつれて、帆足城跡と推定される丘陵で遺構が確認されなかったこともあり、当遺跡が帆足城の主郭跡の一部ではないかという可能性が出てきた。

文献：村上久和「瀬戸遺跡」『九州横断自動車道関係原文化調査概報-日田-玖珠間-』2 1992 P54-55。



瀬戸遺跡位置図



瀬戸遺跡遺構配置図

111. 治別当遺跡

所在地 玖珠郡玖珠町大字四日市字治別当
調査原因 道路建設
調査期間 910401～920330
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 26,900㎡
担当者 染矢 知徳
処 置 次年度調査継続

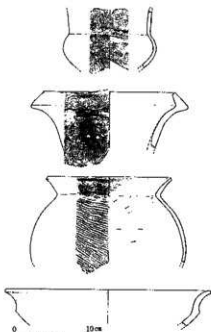
位 置 治別当遺跡は、玖珠川の支流にあたる森川西岸の河岸段丘上、上ノ原台地の南側斜面に位置している。標高は約330mである。調査対象区は、森川に添って東西660mと広範囲にわたるため便宜上A～C地区を設定しており、本年度はB地区の調査を実施している。

遺 構 大溝1条、小溝12条、掘立柱建物1棟を確認した。大溝は幅7m以上、深さ1m50cm以上、小溝は幅80cm～8m、深さ10cm～2m以上をそれぞれ測る。大・小溝は平面的には交差して観察されるが、切り合い関係は不明である。大溝南・北端には杭列を確認しており西岸沿いに60本を数える。

遺 物 遺物については大溝砂礫層中より弥生時代終末から古墳時代初頭の土器片、木器、種子等が出土している。



治別当遺跡位置図



治別当遺跡出土遺物実測図

文献：染矢和徳「治別当遺跡」『九州横断自動車道関係埋文調査概報--日田～玖珠間--』2 1992 P.46～48。

112. 四日市地区^{よっかいち}

所在地 玖珠郡玖珠町大字四日市
調査原因 中継局の増設工事
調査期間 910917～910920
調査主体 玖珠町教育委員会

調査面積 1,000㎡
担当者 横山 啓二
処置 計画通り工事

概要 四日市地区は太田川左右岸に位置し、近辺には周知された遺跡も残存する地区である。

調査区は周知遺跡外の地区ではあるが、近隣した地区に遺跡があるために調査を行った。その結果、遺跡の確認には至らなかった。



四日市地区位置図

113. 小田遺跡^{おた}

所在地 玖珠郡玖珠町大字小田1057
調査原因 小学校建築
調査期間 910917～910919
調査主体 玖珠町教育委員会

調査面積 1,000㎡
担当者 横山 啓二
処置 計画通り工事

概要 小田遺跡は、玖珠盆地西端部近辺に位置しており、遺跡周辺は大小の舌状台地上からなるものである。この地は古くから鬼塚古墳が比較的良く知られているが、その実態は縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。

調査は小田小学校改築工事に伴う事前調査として実施した。その結果、旧校舎建設のおりに破壊されたと思われる、遺跡の確認はできなかった。



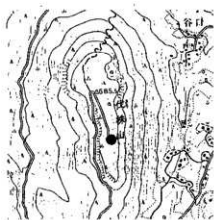
小田遺跡位置図

114. 伐株山城跡

所在地 玖珠郡玖珠町大字山田字万年山
調査原因 中継局の増設
調査期間 910912
調査主体 玖珠町教育委員会

調査面積 10m²
担当者 横山 啓二
処置 計画通り工事

概要 伐株山は、玖珠町の中心部からはば中央の南側に立地し、万年山の北支峰の先端部に位置している。伐株山は中世の山城として知られているが、その詳細は報告書伐株山城跡に見られる。調査は中継局の増設のために行ったものだが、当初の増設区を狭め、さらにその地区を調査した。その結果、遺跡の確認はできなかった。



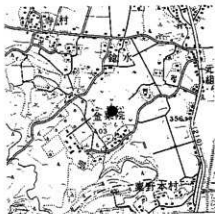
伐株山城跡位置図

115. 大隅地区

所在地 玖珠郡玖珠町大字大隅1700
調査原因 家畜市場建設
調査期間 910810～910830
調査主体 玖珠町教育委員会

調査面積 20,000m²
担当者 横山 啓二
処置 計画通り工事

概要 大隅地区は、おごもり遺跡をはじめ亀都起古墳、船岡山古墳等の周知された遺跡が多く点在している。この地は万年山麓の扇状台地からのびる舌状支丘の中央部に立地するものである。このため、調査区は周知遺跡外の地区であるが事前調査を実施した。その結果、当地区はおごもり農場地内であり、農場を開発した当初に破壊されており、遺跡の確認には至らなかった。



大隅地区位置図

116. 高城(恵良城)跡

所在地 玖珠郡九重町大字恵良字高城
調査原因 別荘建設
調査期間 911101～911130
調査主体 九重町教育委員会

調査面積 200㎡
担当者 綿貫 俊一
処置 平成4年度本調査

位置・環境 高城は玖珠盆地を構成する東北端の丘陵上に立地する。高城は盆地低部からの比高差が約80mあり、北側・西側・南側などが眺望できる。高城の最高部の標高は436mである。高城が立地する丘陵と、盆地底部の間は扇状地状の地形となっており、ここには現在集落が発達している。この扇状地には、「タテヤシキ」という屋号や「キド」という小字名が残っている。尚、高城の東側は浅い谷となっており、対面する丘陵上には「ヤブサメ」という地名が残っている。



高城跡位置図

遺構・遺物 主郭部分に12ヶ所のトレンチを設定し、発掘調査を進めた。その結果、果樹園の造成と施肥時における掘削によって遺構検出面はかなり削平されていた。したがって、建物跡等の遺構は良好な状態で残しておらず若干の柱穴が観察されたに留まる。遺物は、トレンチ内の擾乱土から、青磁・土師質土器・近世陶磁器が出土した。高城に関連すると思われる遺物は、青磁や土師質土器であるが、小破片が多く詳しい所属年代は不明であった。尚、今回試掘を行った主郭（約7300㎡）と副郭（約1600㎡）の間には腰曲輪が良好に残っている。

117. 都原遺跡

所在地 玖珠郡九重町大字引地字都原
調査原因 製材所建設
調査期間 911101～911227
調査主体 九重町教育委員会

調査面積 1,500㎡
担当者 綿貫 俊一
処置 調査後破壊

位置・環境 都原遺跡は玖珠盆地から約1.5km程、上流域の山間部に位置する。遺跡は玖珠川の支流である町田川によって形成された河岸段丘上(左岸)に立地する。加えて玖珠川と町田川の合流点を望むことができるポイントでもある。町田川からの比高は約30mで、標高約420mである。



都原遺跡位置図

遺構・遺物 縄文時代後期：堅穴住居址 3

1号住居址は直径 250cmの円形住居址である。中央部に浅い地床炉が位置する。そして地床炉を中心に2つの柱穴が存在していた。

2号住居址も直径 250cmの円形住居址である。中央部に石囲炉が位置する。そして石囲炉を中心に2つの柱穴が存在していた。

3号住居址は3m×4mの楕円形を呈するが、そのプランはやや不明瞭であった。内部には人頭大～数cm大の石が多量におおわれていた。

1号住～3号住居址から出土した多量の遺物の大半は、石器・石片と土器からなっている。土器は、西平式段階の大型や小型の深鉢が主体である。口縁部の形態は水平～波状を呈する。石器類には扁平打製石斧・石鏃を主体に、多くのスクレイパー類がある。その他、植物の種子類が若干出土している。